

SGRA REPORT

SGRAレポート No. 105

NO. 105

ISSN 1346-0382

第71回 SGRAフォーラム

20世紀前半、 北東アジアに現れた 『緑のウクライナ』 という特別な空間

第71回 SGRA フォーラム

20世紀前半、北東アジアに現れた『緑のウクライナ』という特別な空間

■ 開催の趣旨

ロシア帝国は中国とのネルチンスク条約、アイグン条約、北京条約によって極東の大きな領土を手に入れることができた。その極東の国境沿いの領土はあまりにも人口が少なかったため、定住者を増やすことが政治地理的な大きな課題となった。

ほぼ同時期の1861年に農奴解放令が發布され、当時ロシア帝国に付属していたウクライナの農奴はやっと農地を手に入れたものの、配給された土地は非常に小さく不満を抱く人が多かった。そこでロシア帝国政府は「帝国の南側から極東に家族ごと移住すれば、かなり大きな農地をもらえる」と宣伝し、1870年からロシア革命までに大勢のウクライナ人が極東に移り住んだ。

1918年1月にキエフで独立共和国の宣言が行われた時、極東のウクライナ人は「緑のウクライナ」という国を作ろうとしていた。1922年にソ連政権が極東に定着した時、その政権から逃れた100万人のウクライナ人がハルビンなどに移り住み1945年まで留まっていた。

本フォーラムでは、いろいろな民族が住み、さまざまな文化が存在し、新たなアイデアもたくさん生まれていた、20世紀前半の極東アジアに存在した特別な空間について話し合った。

SGRAとは

関口グローバル研究会（Sekiguchi Global Research Association/SGRA）は、良き地球市民（Global Citizen）の実現に貢献することを目標に2000年に設立されました。渥美国際交流財団の所在地、東京都文京区「関口」に因みます。SGRAは日本の大学院で博士号の取得を目指して研究を行い、渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となり、現代の課題に立ち向かうための研究や提言を、フォーラムやレポート等を通じて社会に発信しています。幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動が狙いで、多国籍の研究者が広汎な知恵とネットワークを結集し、多面的なデータを用いて分析・考察を行います。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録できます。

http://www.aisf.or.jp/sgra/entry/registration_form/

20世紀前半、北東アジアに現れた『緑のウクライナ』という特別な空間



日時 2023年6月10日(土) 14:00~17:00
開催方法 渥美国際交流財団ホールおよびオンライン
主催 渥美国際交流財団関口グローバル研究会(SGRA)

【開会挨拶】	マグダレナ・コウオジェイ(東洋英和女学院大学)	4
【講演1】	『緑のウクライナ』という特別な空間 オリガ・ホメンコ(オックスフォード大学日産研究所所属英国アカデミー研究員)	5
【講演2】	マンチュリア(満洲)における民族の交錯 塚瀬 進(長野大学環境ツーリズム学部学部長)	15
【話題提供1】	中国東北地域における近代的な空間の形成： 東北蒙旗師範学校を事例に ナヒヤ(内蒙古大学蒙古学学院歴史系副教授)	27
【話題提供2】	『マンチュリア』に行こう！ グロリア・ヤン ユー(九州大学人文科学研究院広人文学コース講師)	31

自由討論 37

司会／モデレーター：

マグダレナ・コウオジェイ(東洋英和女学院大学准教授)

討論者：

オリガ・ホメンコ(オックスフォード大学日産研究所所属英国アカデミー研究員)

塚瀬 進(長野大学環境ツーリズム学部学部長)

ナヒヤ(内蒙古大学蒙古学学院歴史系副教授)

グロリア・ヤン ユー(九州大学人文科学研究院広人文学コース講師)

講師略歴 49

あとがきにかえて 50

開 会 挨拶

マグダレナ・コウオジェイ

東洋英和女学院大学



みなさんこんにちは。本日はSGRAフォーラムにお集まりいただき、ありがとうございます。私は本日、モデレーターを務めますマグダレナ・コウオジェイと申します。渥美財団の元奨学生で、今は東洋英和女学院大学で教えています。実は本日の登壇者は塚瀬進先生以外全員が元渥美奨学生というSGRAフォーラムの中でも特記すべきプログラムとなっています。渥美財団はもともと博士号を取得するために日本の関東地方の大学院に在籍して研究を続ける外国人留学生（去年からは日本人学生のサポートも開始）している奨学財団ですが、国際的な研究交流ネットワークSGRA（関口グローバル研究会）をつくり、グローバル化に伴うさまざまな課題を学術的かつ国際的にディスカッションする活動を続けています。

まさに今、私たちがいるこの場所が、東京の文京区の関口というところで、ここからグローバルに発信して行こうと考えてつけられた名前です。渥美財団の設立が約30年前で、SGRAは5年目に成立しましたから、すでに25年。今日のSGRAフォーラムは第71回となります。

渥美財団の今西さんから今日のお話をいただいたときに、私はすぐ引き受けました。私の研究テーマは20世紀前半、日本帝国とその植民地における美術史です。私の博士論文の中では「満洲」は取り上げませんでしたが、とても興味があります。ですから今日のフォーラムはとても楽しみにしています。

今日はコロナ以降初めて登壇者の先生方全員が会場に集まってくださいました。最初に講演して下さるホメンコ先生は、イギリスのオックスフォードから、塚瀬先生は長野県の上田市から、ナヒヤ先生は中国の内モンゴル自治区のフフホト市から、ヤン先生は福岡からと、先生方にお集まりいただき、この会場がスタジオになって世界中にオンラインで配信しています。

それでは早速始めましょう。最初の講演はオリガ・ホメンコ先生をお願いします。ロシア侵攻数日前にウクライナのキーウからヨーロッパに出られ、2020年は日本で過ごされましたが、秋からオックスフォード大学に移って研究を続けていらっっしゃいます。では、ホメンコ先生よろしくお祈りします。

講演 1



「緑のウクライナ」という特別な空間

オリガ・ホメンコ

オックスフォード大学日産研究所所属英国アカデミー研究員

皆さん、こんにちは。今日はお招きいただき、誠にありがとうございました。まずは、渥美財団の皆さんや同窓生の皆さんに心から感謝したいと思います。今までさまざまな交流があって、多くのシンポジウムやセミナーのおかげで自分の研究を展開することができ、おかげさまで卒業して博士号も獲得することができました。今までたくさんのサポートをありがとうございました。

1. 「緑のウクライナ」とは

今日お話ししたいテーマは、私がこの7～8年ぐらい研究している「緑のウクライナ」という特別な空間についてです。

まず「緑のウクライナ」とはどういう場所かを説明しますと、ロシア帝国が中国と戦争したり交渉したりした結果、ネルチンスク条約、北京条約、アイグン条約という三つの条約を経て、極東に大きな領土を手に入れることができました。まだ住人の少ないその領地に、ロシア帝国内から人を移動させられないかと考えたロシア政府は、ちょうど同時期に農奴をロシア帝国内で解放したのです。

例えば南ロシア帝国、いわゆるウクライナは特に農地が豊富な領土でしたが、農民がもらった区域が非常に小さな区画だったため、農民たちは不満を感じていました。そこで Санкт-Петербург の政府が「極東に行けば20倍ぐらい大きな農地をもらえますよ」とうまく宣伝したのです。しかし、気候や土壌が全然違うということはあまり告知されず、家族そろって移住するという、いわゆる開拓民になることが条件付きの厳しい政策でした。植民地理論で言えば、セトラー・コロニアリズム (settler colonialism) にあたります。

人の移動をより簡単にするためにオデッサという港町に船会社が設立され、船で農民たちを連れていく仕組みも作られました。それまでは大陸経由で馬車などの陸路の手段しかなく非常に時間がかかったのですが、1870年代に「ドブプロット」という会社が誕生し、船で移動するようになってからは、大体1カ月半で極東まで移動できるようになりました。

オデッサの資料館を調べると、農民は勉強熱心で堅実な人が多く、雨がよく降るか、どういう道具を持っていった方がいいかなど、政府に手紙を書いていろいろと調査していたことがわかります。また、船に乗った人の記録も残っているので、それを見ると家族形態も知ることができます。

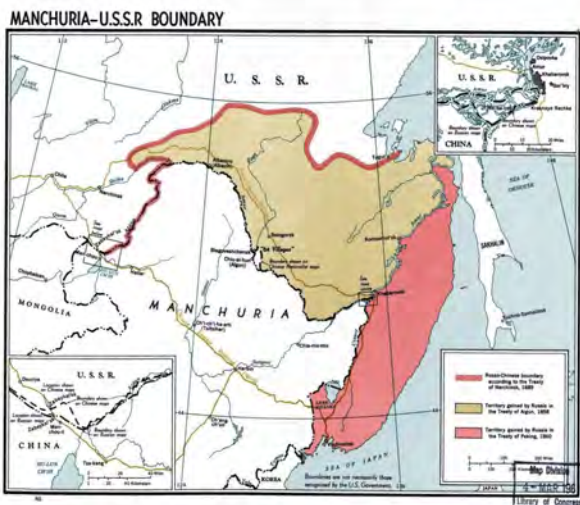
1870年から1917年のロシア革命までの50年弱の間に、50万人から100万人ほどの人々が極東に移動しました（ロシア帝国では1890年代あたりから人口調査を始めていますが、いろいろな統計があるので、どれを信じればいいのかは非常に複雑です）。そのうちの1割ぐらいの人たちは、寒くて住みづらいなどの理由で帰っています。

移住した人々は自分の村を開発して名前を付けてそこに住みました。例えば、アメリカやカナダのラテンアメリカへの移民などの歴史を見ても、アメリカに行った人はまちづくりをしているときに、ヨーロッパなどの自分が住んでいた町の名前にニューを付けましたね。ニューオーリンズなどがそうした例の一つです。極東に行ったウクライナ人の場合は、自分がウクライナに住んでいた地域の名前をそのまま開拓地の村の名前にしました。ですから、ウクライナとほとんど同じか、似ている地名がたくさんあります。ウクライナにチェルニーヒウという町がありますが、極東にもチェルニーヒフカという村があります。ウクライナにホロールという名の川があり、向こうにはホロールという村があるというように、大体同じような名前を付けたのです。

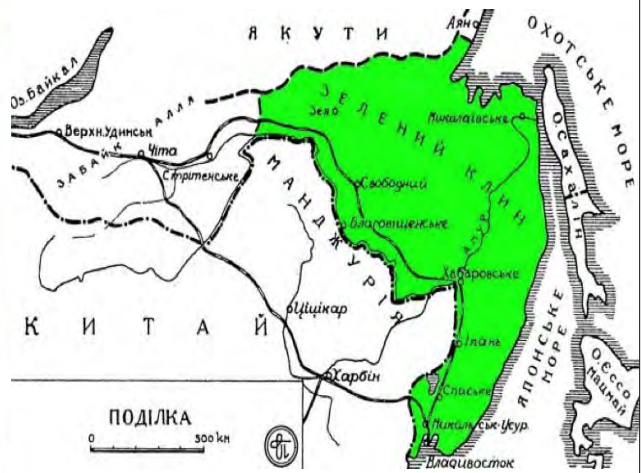
なぜ「緑」のウクライナなのかというと、まずは農民だから。より大きな農地をもらえて農業を行う目的で移住したからです。そして、森に囲まれている都市だからです。

移住した人々は後年自分たちの旗も作っています。ウクライナの旗は青と黄色

極東へのウクライナ人開拓民への移動 (1870-1917)



ネルチンスク、アイグン、北京条約で拡大したロシア帝国領土



緑のウクライナと名付けたウクライナ人開拓民の地域

スライド 1

の2色が上下に配置されている一方で、緑のウクライナではそこに緑の三角が入っています。「ゼレニー・クリン」という地域の名前も新たに作ろうとしていまして、このクリンというのは“ある三角の区画”というような意味で“農業のための場所”という意味でもありました。

この地図（スライド1）の面白いところは、先ほど述べた三つの条約の結果拡大したロシア帝国領のその部分が、そのまま「緑のウクライナ」になっているところです。そこにウクライナ人が非常にたくさん移動し、人口の8割から9割近くを占めていたようです。

2. 民族意識の芽生えと活動

ここに来て、彼らはおそらく太平洋も初めて見ましたし、いろいろな民族に初めて会いました。ロシア帝国時代のウクライナの領土にどのような他民族が住んでいたかという、ユダヤ人やポーランド人、ブルガリア人、ルーマニア人などの近隣地域の人たちはいましたが、東アジアの人とはこの新しい領地に行ってから初めて出会いました。いろいろな人に初めて会って、自分のアイデンティティ、自分はどのような者か、どのような言語を語っているか、どのような文化を持っているかを初めて考えさせられたのです。研究理論でもそうですが、他者に初めて会ったときにそういうことが行われます。当初合唱団などのいろいろな文化的なイベントが行われたのもそうした背景があったからでしょうか。

また、第一次世界大戦とロシア革命が起きたとき、ロシア革命下では社会問題が一番大事な問題にされていましたが、極東に移ったウクライナ人にとっては民族問題が第一課題になりました。なぜかという、ロシア帝国ではすでに2番目に大きな民族だったのですが、どちらかという、マジョリティではなくてマイノリティと見られていました。それが緑のウクライナに移って以降、次第に人口の8割から9割を占めるようになり、初めてマジョリティの状態になったのです。そこで自分たちの権利がちゃんと守られているかを考えたとき、自分たちの言語で教えられる学校もないなど、いろいろな民族問題が出てきました。

第一次世界大戦とともに、チェコを始めいろいろな地域から軍隊がウラジオストク辺りに入りましたが、それらの軍隊の中にウクライナ人も結構いました。その中のどちらかという、教育レベルが非常に高い人や極東に仕事で流れていった人など、さまざまなヨーロッパの首都で教育を受けた人々が、より活発に民族運動に参加するようになりました。1918年春のある日曜日に、各国の軍隊に入っていたウクライナ人が平和的なデモを行いました。2000人ぐらい集まって、地元の人是非常にびっくりしたと伝わっています。これは、キーウに住むウクライナ人が1918年1月22日に独立宣言をしたことを受けて、遠く離れた自分たちも自治共和国としてウクライナに付属し、同じ自治共和国の「緑のウクライナ」として独立宣言に同意する、という意思の提示だったのです。1918年の春から秋にかけて4回行われた「極東におけるウクライナ人集会」では、教師、農民、軍人、知識人などが参加しており、第2集会の頃にはキーウへ自分達の代表者を送

ロシア革命と1918年のウクライナ独立国家



ウクライナ共和国の中央ラーダ（議会）の3回目の宣言



1917年、ウクライナ共和国中央ラーダの幹部（一列目左からI・ステシェンコ、H・バラノフスキー、V・ウインニチェンコ、S・エフレモフ、S・ペトリューラ；二列目左からP・フリスチュック、M・スタシュック、B・マルトス）

スライド2

り、領事館の創設や政治体制のような仕組み作りの構想を伝えています。実際にウラジオストク、ハルビンなどの大きな町でも、ウクライナ人の政治体制、市役所のようなものを作りました。

それとはほぼ同時に新聞もたくさん発行されるようになりました。新聞は全て自費というか、クラウドファンディングというか、そのような形でいろいろな所から出資されました。20紙ほど発行されていて、その資料を見つけたときに、ウクライナでもあまり知られていない事実なのでびっくりしました。

この人たちは1918年に独立を宣言したウクライナ政府の人たちです。写真を見ると背広姿が多いのですが、そうではない人もいます（スライド2）。ウクライナ共和国の最初の議会は6人で、その後13人ぐらいまで増えて、女性の議員もいました。だから最初からジェンダーイクオリティについても考えていたのでしょう。ウクライナ独立国家はいろいろな国際事情が重なり2年未滿しか持たなかったのですが、憲法も制定し、そこにもやはり諸民族の権利を守るということを非常に具体的に書いています。憲法の下書きを作った人物はエストニア出身のウクライナ人の法律家で、最初からこうした民族の権利へのまなざしは国づくりの中に自然と含まれていました。

極東における少なくとも3人の活動家を取り上げると、1人目はドミトロー・ポロウィックという人で、この人はラトビアのリーガで大学を卒業して、技師と物理学者の資格を持っていて、ウラジオストクで気象庁（気象局）に就職しています。この人のおかげで「緑ウクライナにおけるウクライナ人」という新聞を出版することができました。これは週刊紙で、結構面白いのですよ。記事の一例を挙げると、「キーウで誕生した独立国家に、お金が必要だったらローンでもしてあげましょうか」というものがあります。極東に行って40年ちょっとの間にお

金持ちになった農家も多くありましたから。ところが第一次世界大戦が起きたときに、やはり戦争ですから息子たちを軍隊に取られるのですね。それをすごく不満に思っていました。政府に何もしてもらっていないのになぜ息子たちは行かなければいけないのかと。

2人目はユーリイ・グルシュコ・モーワという軍人で、すごく面白い人です。グルシュコは本当の名字です。彼はチェルニーヒウ州出身で、戦争でウラジオストクに行くことになって、軍人で社会活動家だった。各地から軍隊が来たときに、いろいろな国の人たちと交流があったので、ある意味で外交官の役割も果たしていたのです。モーワというのはウクライナ語で「言葉」という意味なのですが、それはペンネームとして付けたのです。グルシュコという名字は、非常によくある名字で、田中さんほどではないけれども中村さんぐらいです。

3人目のペトロ・トベルドフスキーさんはロシア帝国の軍人で、ウクライナ系の人です。民族運動が盛んな時期に領事として選ばれ、キーウにも送られています。ウクライナ人が独立宣言をした当時の政府は3回ほど体制が変わっているのですが、ちょうどその変わり目にキーウに着き、スコロパツキー新大統領に代わるタイミングで、ドロシェンコ外務大臣だけに会って、極東におけるウクライナ共和国の領事にされ、戻ってハルビンで領事館をつくったのです。この人は最後ソ連政権に捕まってしまうのですが、奥さんと娘さんはアメリカに亡命することができたお陰で彼の学歴などの資料が見つかりました。見つけた時はすごく感動して面白かったです。

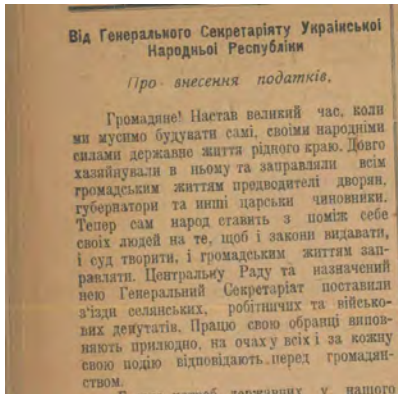
ウクライナ人は極東に行ったのですが、それはウラジオストクだけではなくたのです。もう一つの場所はどこだったかというとハルビンです。ハルビンでは鉄道建設にウクライナ人が非常にたくさん関わっていて、その後、運営委員長にもなったロシア帝国の軍人のレオニッド・ホルワットという人がいます。この人はキーウから200キロ離れたポルタワ出身で、元々コサック時代にクロアチアから来た人の子孫でもあります。日記を読むと、特に革命後のいろいろな時代の話が出てきて、「僕のおじいちゃんもひいおじいちゃんもみんなウクライナ人女性と結婚しているから、僕はウクライナ人とかなり関係があるのですよ」と書いています。ハルビンで鉄道建設の仕事についてウクライナ人がそのまま鉄道会社で働き、その後店などを開いて商売を広げてきます。実は1906年に初めて、キーウとウクライナ以外で「ウクライナクラブ」という文化活動が生まれたのはハルビンでした。その次の事例は2年後のサンクトペテルブルグです。ですから、どちらかという極東でのウクライナ人の活躍が割と早かったと言えます。そこでも活発に新聞を発行していて、クラブの通信の新聞もだし、それ以外に「マニウェーツ（遠い所という意味）」という新聞も出しています。この新聞の名前はハルビンがウクライナ人にとって大変遠い一方で近い場所でもあったことを表しています。

もう一つ、「ザシーフ（土に種をまくという意味）」という新聞もありました。「ザシーフ」は1917年から1918年の間に発行され、ステパン・ククルザ、日本語で「とうもろこし」という名字を持っていた人が編集者を務めています。彼は元々合唱団の指揮者というか、運営者をしてきた人物で、極東におけるウクライ

ナ人集会のメンバーで最後の極東における第四集会の秘書も務めていました。その後ハルビンに移ってそこで新聞発行に関わると同時に教会の手伝いもする、非常に多才な人でした。この「ザシーフ」の新聞記者だったオレーシ・ドスウィトニーイという作家兼ジャーナリストは、もともと様々な記事を書いていましたが、その後ロシア革命後にソ連軍に追われる形でウクライナからアメリカに逃れ、そこからハルビンに来て「ザシーフ」に色々投稿していた人物です。1917年11月にこの新聞の第1号が出たときに、「私たちは自分の言語で新聞を出すことは非常に意味があると思っていて、こと遠く離れた所に住んでいるウクライナ人にとっては非常に大きな意味がある」と書いています。先走ってしまうのですが、「ザシーフ」に関わったクルザ家は1930年代半ばに激しいホームシックになってウクライナに帰ってしまいます。その後、一家は取り締まられたものの息子一人だけ生き残った。彼は名字を変えて正教会の神父になったため命が助かったのです。その後ウクライナではなくロシアのとても小さな町で80歳ぐらいまで生きていました。

この新聞を読みながら、ウクライナ人とウクライナがどこにあったかの相関関係を考えるのは非常に面白いことです（スライド3）。まずこの新聞の読者はウクライナ語を話す人であるとしてあります。そして、ウクライナ人はまずウクライナ語を話し、ウクライナ史に興味を持ち、ウクライナ史を勉強する。そして自分の祖先の文化と伝統を大事にし、この新聞を読み、子どもをウクライナ語学校に行かせる人である。特に自分達は極東アジアに住んでいるので、自分の存在をきちんと理解するためにそうしなければならないと書かれています。そして彼らにとってはハルビンも緑ウクライナの中に入っていたわけですが。緑のウクライナは、シベリア極東からさらにずっと広がっていて、「ザシーフ」は極東に置かれたキーウ付属の緑ウクライナという政治体制をつくるための大切な新聞でし

Zasiv (ザシーフ)



ハルビンでウクライナ人が発行していたウクライナ語の「ザシーフ」新聞、1917年11月26日3号5頁

- ウクライナ人とは
- ウクライナ語を話す人
- ウクライナ歴史に興味がある人・勉強する人
- 先祖の文化伝統を大事にしている人
- ウクライナ語の新聞を読む人
- 子供をウクライナ語学校に行かせる人
- ウクライナと極東満洲にいる人
- キーウ付属の「緑ウクライナ」という政治自治体を作ると考えている人
- キーウの政府に税金を払う人
- «People are united into one nation not only by living in the same land – they are also united by language, ancient ancestral customs, and the search for one truth. When it happens that we have gone to different places, let us take care not to lose the signs of our people, let us remember who we are and where we come from, what kind of parents we had. In the union of all our people, we will create further life; then our race will not be uprooted anywhere, and we will not be laughed at by strangers who until now considered our language, our custom, our truth as nothing»
Zasiv, 26. 11. 1917 номер3, с. 5 Ів. Стещенко «До українців поза межами України суцях».

スライド3



ウクライナの家, ハルビン
1918 - 1926, 1933 - 1945

スライド4

た。その証として、当時キーウでできたウクライナ共和国の政府が発表した「極東のウクライナ人もロシアではなくキーウの政府に税金を払うべき」という呼びかけも掲載しています。

1918年1月22日に独立宣言をしたウクライナ共和国政府が「緑のウクライナ」の地図も発行しています。その当時のウクライナ政府関連の資料を読むと、ウクライナ本国の人口が増え続け農地が足りなくなった場合、既にウクライナ人が多く住んでいて、いわゆるウクライナの外のウクライナ付属の自治体になろうとしている極東の「緑ウクライナ」に人を住ませればいい、と考えていたことが分かります。1918年にハルビンにできたウクライナ教会はその後ずっと活動し続け、革命後にウクライナ人が難民・移民になった時には、最初の拠り所になる盛り場というか出会いの場所になったのです。今もハルビンにまだ残っています。ハルビンは始めから多民族の町で、ロシア正教会の教会だけでもおそらく10カ所弱、その他に仏教のお寺やユダヤ教のシナゴグなど、本当にいろいろな宗教施設がありました。そのほか、やはり自分の文化会館が欲しいということでウクライナ人はお互いにお金を集めて1918年にこの立派な会館も造りました（スライド4）。ただ、ハルビンで自分達の会館を作ることができたのはウクライナ人だけでした。

私が研究してきたイワン・スウィットという人物は、ハルキウ州のクピャンスクという町に生まれて、ハルキウ大学の数学物理学部で勉強したのですが、戦争と革命が起きて卒業できなかった人です。その後アメリカに行きたいと思い立ち、なぜかウラジオストク経由で行こうとしました。調べたらおじさんが極東のロシア正教会で神父をしていました。それで極東に移り、イワンさんは民族運動にはまって、ジャーナリストとしていろいろな記事を書くようになり、ウクライ

ナ通信社の創立にも携わった。ソ連政権が極東に到着する頃の1922年の秋にハルビンに移りそこでも新聞記者として活躍していました。

3. 1930年代のマンチュリア

マンチュリアには元々そういうところがあるのですが、1930年代ごろからは特にいろいろな思想、民族、コミュニティが増えてゆき、ウクライナ人、ロシア人、満洲人、中国人、ポーランド人などいろいろな人が住みました。先ほどお話したように、1917年に最初の新聞を発行した時はキーウの国家と非常に強いつながりがありました。しかし、ウクライナの独立国家は1918年1月22日に独立を宣言してから2年も持たずにピリオドを打ち、ソ連軍がきて1919年の冬からソ連の中のウクライナ共和国になりました。

その後1932年にハルビンでイワン・スウィットによって「満洲通信報」が発行されるようになりますが、興味深いのは、この頃すでにいわゆるウクライナ国家、つまり独立したウクライナは存在していなかったということです。国家がないにも関わらずこの新聞のおかげでウクライナ人イメージングコミュニティを作ることができ、これは海外に住んでいるウクライナ人のネットワーキングにも役立ちました。またこの「満洲通信報」は小民族を代表する新聞でもありました(スライド5)。小民族とは、元々ロシア帝国でも満洲でも小民族だった、ウクライナ人、タタール人、ジョージア(グルジア)人、ポーランド人のことですが、そうした民族に限らずそれ以外の人々へも「居場所を作る」メディアと考えられ

SGRA REPORT



「満洲通信」1932年8月5日の第1号



イワン・スウィット (1897-1989)



イワン・スウィットが満洲から送った手紙

「満洲通信報」(1932-1937)

- 3カ国語の小民族を代表する新聞
- 編集者のイワン・スウィット(1897-1989)
- 多民族国家を考える新聞

スライド 5

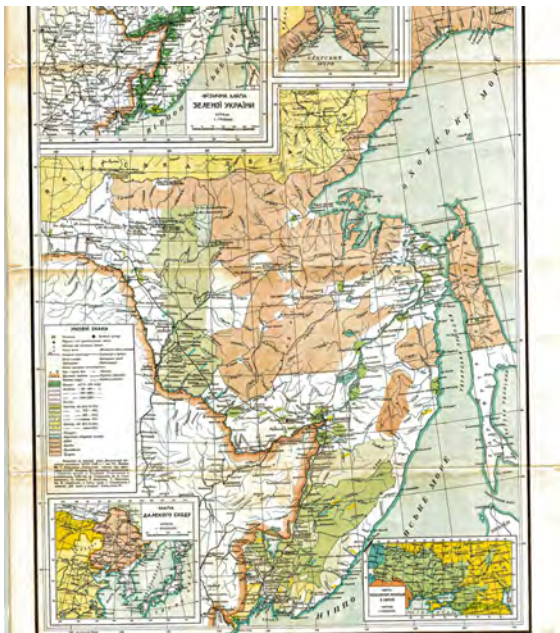
ていました。この新聞は、ウクライナの実業家ペトロー・ボロビーイの資金で成り立っていて、どうも日本側も少し資金を出しているらしいのです。使用言語はウクライナ語、ロシア語、英語の3カ国語の新聞ですが、大体9割以上の内容はウクライナ語でした。

スウィットの旅を見ると、非常に興味深いものがあります。彼はハルビンで「満洲通信報」の編集者になり、クピャンスクという町からハルキウ、ウラジオストク、ハルビンへ、また第二次世界大戦が終わってから台北、アラスカ、ニューヨーク、シアトルまで行っています。飛行機が飛んでいない時代にこれだけ移動しているのです。この人の移動した距離、またネットワークや人脈には本当に驚かされます。

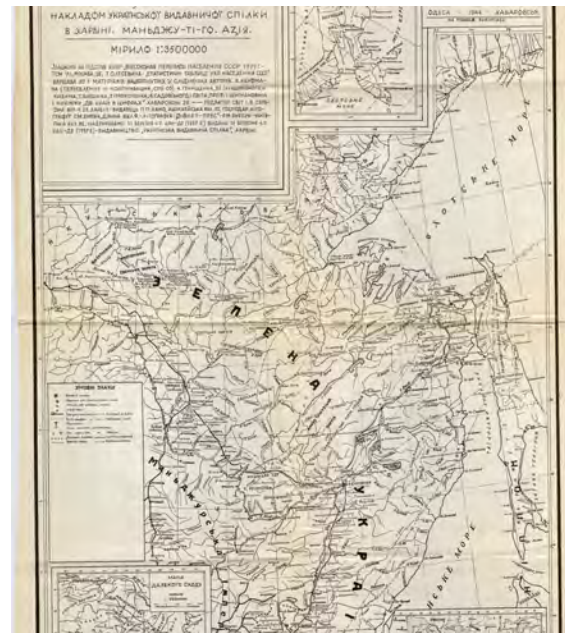
先日アメリカの資料館で見つけたのですが、この人は1932～1937年の間に「満洲通信報」を発行していて、1937年からは日本からもこの新聞の発行許可が出されています。ウクライナについていろいろと主張していたために、当時の中国が掲げていた五族共和というスローガンの定義に入れれないというのが理由でした。1917年から1918年の間には極東における民族運動史を書こうとし、マニユスクリプトまで書き終わったものの一度も出版することはありませんでした。その文章は、私がアメリカで見つけて、2021年に自分のモノグラフの中で出版しました。それ以外にイワン・スウィットは1972年に、1900年から1945年までのウクライナと日本の関係についての本も出しています。

彼の友達、また協力している人々の中で特に面白いのが作家で外交官のステパン・レウインスキーという人物です。この人はパリで日本語を学んだ日本研究者でもあります。彼は西ウクライナのリヴィウ出身で当時はポーランドとの関係が

Maps of Green Ukraine, 1937 and 1944



緑のウクライナの地図、1937（ハルビン、カラー）



1944年（オデッサ・ワルシャワ版、モノクロ）

スライド 6

ありましたので、1936年あたりに、ポーランド政府の仕事でハルビンのポーランド領事館で経済担当になります。実はフランスで留学していた頃、日本館という日本人留学生向けに1928年に造られた建物に唯一の外国人として住んでいたという記録があります。そこで出会った様々な日本人について1930年代にウクライナ語で「日本の家から」という日記も出版しており、調べたら、一緒に寮に住んでいた日本人の中には後に有名になる建築家の前川國男さんもいました。

スウィットとレウインスキーは1937年に緑のウクライナの地図を出します(スライド6 / p13)。その当時存在していない国で、中国にいたソ連政府からは批判されました。しかし地図が発行されたことで極東におけるウクライナ人がどこに住んでいるかが示され、彼らが夢にまで見た自分達の自治体、国の領土が示されたのです。

1944年にはウクライナ語・日本語の辞典も出版されます。とても面白くて、1万1000語が掲載されていて、両言語の架け橋としてとしてロシア語も使っていた。なぜなら当時満洲にいた軍人などがロシア語も上手だったからです。

極東マンチュリアのウクライナ人はいろいろな活動をしながら、ウクライナの外でウクライナを考えながら、文化を大事にし、新聞発行もし、お互いにコミュニティとして成り立たせるために様々な工夫をしてきました。マンチュリアだけで10万人くらいのウクライナ人がいたにも関わらず、この話はほとんど忘れられています。日本とウクライナの交流や外交史、20世紀のウクライナ人のアイデンティティ形成にとって、それから世界史、国際政治史においても非常に大事な話だと思い、ぜひこれを今日話したかったのです。

今日はご清聴どうもありがとうございました。

講演 2



マンチュリア（満洲） における民族の交錯

塚瀬 進

長野大学環境ツーリズム学部学部長

はじめに

ご紹介にあずかりました塚瀬と申します。長野大学で教師をしております。

私はマンチュリア、満洲、別にどちらでもいいのですが、そういう所の地域史の研究をしております。中国史研究から入って、満洲と呼ばれている、今は中華人民共和国の主権下にある所ですが、この地域の地域性の研究をしています。

いわゆる日本で行われている日本人による満洲研究というのは、戦後になるとどうしても日本近現代史の人が「満洲国」との関わりや、また日露戦争後の大陸政策との関わりから研究をしている人が多いのです。そういう人たちは専門が日本史ですので、どうしても地域史研究とはかなり距離がある満洲像というものを描いていると私は思いました。

戦前の1930年代、1940年代の満鉄の調査や「満洲国」の政府関係者などが残した日本語の史料には、その前の清朝時代のことなども日本語で書いてある部分があるので、日本史でやられている方たちは、そういうところをいろいろ使って満洲はこういう地域だったという満洲像を描いています。私は多分にそれは、今から80年以上も前の研究成果で、そういう戦前の日本の調査報告書を基に満洲の歴史を書くというのは、研究が進んできた今日ではどうなのかと。今ではやはり一次史料に基いて、この地域に活動していた人たちが残した史料があるわけですから、そういうものを使ってやっていくというスタンスでやっています。

本日も先ほどホメンコ先生から話があったように、マンチュリアという所にはさまざまな人たちがいて、国境や民族などのくくりでもって、それだけで進めていく研究はなかなか難しいと私は思っており、それは元々このエリアが持っていた特徴に起因していると考えております。

本日は、表題は「民族の交錯」となっていますが、これは最初講演を引き受けたとき「こんな感じで」と申し上げたもので、今回の渥美財団の趣旨をいろいろ理解していくと、満洲がどのように形成されて、どのように中華人民共和国の主権下に入っていくのかというところをトレースしたような報告をした方がいいか

など思い、本日の報告内容を準備しました。

マンチュリアの萌芽期、形成期、変容期という感じで、地図を使いながら、マンチュリアという地域はどのような地域だったのかということを説明していきたいと思っています。

1. マンチュリアの萌芽期

(1) 15世紀の状況

まず、さかのぼること14世紀ならびに15世紀ごろになりますが、元朝が滅び、明朝が興った後、洪武帝が元の勢力を満洲エリアから駆逐しました。しかし、何か特に統治機構を置くわけでもなく、その次の永楽帝の時代、15世紀になりますと、明朝に対してジュシェン人（注：女真・女直人。現在は片仮名でジュシェン人と書くのが一般的）が朝貢してくるようになります。

この人たちは、遼東辺牆（注：一部はレンガ、一部は植物のようなもので造られた牆壁）の外に住んでいました（地図1）。遼東辺牆の内側は漢民族の人たちが主に住む所で、ヌルガン地区という所にはジュシェンの人たちが散居して朝貢に来る。朝貢に来る人たちがどういう人たちは別に明朝はほとんど関知しない。来たから恩寵を与えて帰しますよと。彼らがどこで、どれぐらいの規模の集落で、何をやっているのかということは記録にはほとんど残っていません。ならびにジュシェン人自らが記録を残すようになるのは、もう少し後の16世紀になってからです。15世紀のことは明朝の文献によるしかないわけです。



地図1 出典：著者作成。

(2) ヌルハチの台頭

そして明朝がつくった支配の拠点としては、アムール川のヌルガン都司という所に拠点の役所が一時的に建設されました。間宮林蔵なども、アムール川から碑文が建っているのを見たことがあると記録しています。現在碑文はウラジオストクの博物館にあるようですが、ここに拠点は置いていましたけれども、この拠点は程なくして機能しなくなり、捨てられたということを多くの人が言っています。このときにはまだマンチュリアというのはなかった時代だったと思っています。それがジュシェン人がだんだん強くなってくと、変わっていくのです。

それが地図2の明末ですが、これはやや遼東の方で、同じような遼東辺疆があって、外側がジュシェン人の勢力範囲でした。そして、いわゆる漢民族はその内側にいるということですが、ジュシェン人のヌルハチ（1559～1626年）はヘトアラやフェアラを拠点にして勢力を拡大していきます。そして遼東辺疆を越えて、いわゆる遼東に攻め入っていくのです。

ヌルハチは征服地を拡大し、後金という国を建設し、八旗制度によって人々を支配下、統治下に置いてやってきました。この八旗制度が大変重要な意味を持っておりまして、これに編入された人は旗人、または別の戸籍、旗籍と呼ばれましたけれども、それに登録されて厳重に管理されました。それはなぜかという、軍事力として動員するためです。ヌルハチは多分、あらゆる人間を旗人として軍事力に動員できるように法律的に編成した制度、それが八旗制度でした。八旗制度によりヌルハチは強大化できたのだと現在の研究は考えています。

しかし、ヌルハチは遼東の一部を占領するのみで亡くなってしまいました。後継いだホンタイジがかなり強大化し、それでもこの辺はまだ明が守っていたのですが、この辺の明の拠点も征服するというところでホンタイジは死にました。

明末のマンチュリア



地図2 出典：三上次男、神田信夫編著『民族の世界史3 東北アジアの民族と歴史』山川出版社、1989、254頁より筆者作成。

満洲という言葉はいつ生まれて、誰が最初に使ったのかというと、それはよく分かりません。

ただヌルハチ自身は、漢字ではわれわれは満洲で、満洲語ではマンチュリアという表記をしています。それは何に由来しているのかというのは、現在の研究では明らかになっていません。しかしホンタイジは、1635年に自分たちの集団の名称を満洲と呼ぶのだと決めました。今までいろいろあったのですが、他の名前は使ってはいけません。そういうことを言ってから、満洲という言葉が急浮上したと私は考えています。

要するに自分たちの集団名ですね。当時、民族という言葉はまだないです。ですから、自分たちの集団、それは八旗制度に編入されている旗人の集団、それが満洲なのだというふうに私は理解しています。従って、今日的な民族の範疇でこの集団を規定できる場所もあれば規定できない場所もあるというのが私の見解です。そしてホンタイジは死んでしまうのですが、その翌年の1644年、いろいろあってジュシェンの人たちは入関をし、北京に入り、中国支配を始めます。

2. マンチュリアの形成期

17世紀になってマンチュリアは、ロシアとの抗争からネルチンスク条約が結ばれたことにより、輪郭が現在のものとかかなり近いものになったと考えています(地図3)。1644年、まさに入関したときにロシアが極東にも進出してきて、抗争はアムール川流域で何回も起こりました。そういう中で清朝は、防備体制を固めるために吉林將軍を新たに設置。その後、黒龍江將軍を設置し、その後の東北三省、東三省みたいな輪郭が大体できてきます。

ネルチンスク条約のときは、ここから先はロシア領だという碑文が置かれました。ただし、現在の国境線のようなすごく厳密な、細かい国境線が引かれたわけではなかったと考えられています。もちろん条約上ではどこからどこまでとなっていますが、条約上決めた国境ラインに従って、防備体制はその後つくられましたけど、そこに例えばベルリンの壁のようなものがつくられたわけではありません。従って非常にファジーな状況であったと考えられます。

そして中国人(漢民族)との国境といいますか、境は新たに柳条辺牆というものがつくられて、その内側が遼東でした。植物で壁的なものを作り、あと溝を掘って、そういうものでこの内側は漢民族で、それより先はジュシェンの人だけ、ならびにこちらはモンゴルの人たちという大体の漠然としたエリア分けをしていました。このように17世紀後半ごろになると、現在のマンチュリアに通じる地域の形が形成されました。

しかし、国境で閉じた生活を先住民の人は別にしていないのです。さらには国境などという認識が先住民の人にあったのかどうなのかも分かりませんが、黒龍江將軍側の満洲語のものを、承志さんという方が翻訳したものを皆さまにご紹介します(史料1)。



地図 3

史料 1

1684年におこなわれた黒龍江將軍サブスとオロチョンとの間の問答

サブスはオロチョンに対して「おまえらはもともとどこに住んで生活していたのか。ロチャ（ロシア人）がおまえらを侵害したら、我らの軍隊の近くにきて暮らせばよい」と言った。これにオロチョンは答えて、「我らはもともと居留して住むところはない。我らは毎年一度ダグールと穀物の交易をするとき、シリムディの地（不詳）で約束して穀物の交易をする。穀物を得た後、トナカイに載せて（自分たちも）乗って、我らの思うままに適宜、ロチャの住むウディル河の城を越えて、海に至るまで牧畜、漁労をおこなう。兵士が住むところに来たら、我らのトナカイが食べる青苔がない。我らはただトナカイに頼って生活するので、こちらに来ることができない。

出典：承志『ダイチン・グルンとその時代—帝国の形成と八旗社会—』名古屋大学出版会、2009

これは1684年に行われた、黒龍江將軍だったサブスという人とオロチョンの首長との間で行われた問答だそうです。オロチョンの人たちは別に領域国家に住む意識があったわけではなく、かなり自由にアムール川の北岸ぐらゐの場所まで移動して、トナカイに頼って生きているので、常居、定住をするようになると、今までの暮らしが無理ですと言っておりましたという内容です。

しかし、後でお話しますが、このような活動は主権国家、国境線が強くなってきた19世紀後半になるとできなくなってしまうのです。

3. マンチュリアの変容期

(1) ロシアとの条約締結

それがマンチュリアの変容期で、時代がかなり飛んで19世紀の半ばぐらいのお話になってきます。1854年、ムラヴィヨフは初めてアムール川に船団を派遣し、この領域にまたやって来たのです。清朝は伝統的な羈縻政策での対応を最初は基本にしていて、「外夷の撫馭は羈縻により善導すべきであり、軽率に兵力を用いないように」と皇帝は命令をしていました。そして先ほどホメンコ先生の話にありましたように、アイグン条約、北京条約によってここが正式にロシアの領土になるわけですが、先住民の人は「そんなの聞いてないよね」ということになっていくわけです（地図4）。

先住民はアムール川という大河を使って行き来をして、さまざまな経済活動をしていました。ハバロフスクより下流のこの地域が突然ロシア領になりました。従って、これからはロシアの管轄ですよ。これは主権国家の論理ですね。でも、アムール川を使ってさまざまな交易をしていたゴリドなどと呼ばれていた人たちは、清朝から辺民と言われていて、毛皮の貢納のためアムール川に設けられた交易場に赴いて、毛皮貢納をする代償として清朝から綿製品などを受け取っていました。こうした行為は純粋な商業取引ではなく、政治的な上下関係の承認をも含むものです。実際そうであり、さらにロシア側にもそう映ったのです。ロシ



地図4 出典:筆者作成

ア政府は、通商はいいですけど、政治的な意味合いを含んだ貢納は駄目ですと。辺民の人たち、ゴリドなどの人たちはロシアに住む人たちで、ロシアの主権下にあるのだから、他国の政治的影響を認めるような行為は駄目です。これは主権国家の論理ですと。こういうものが19世紀後半になるとかなりせり出します。

同じようにアムール川のもっと上流の方では、オロチョンの人たちが同じように、別に川なんか関係ないよねというふうに、川を一つ的手段として両方を行き来していたのですが、それが認められなくなってロシア側に渡れなくなったということで、これまでの伝統的な生活がかなり影響を受けていくような時代へと、19世紀後半になると変わらざるを得なかったのです。さらにこの頃、19世紀に外国が作った地図には「マンチュリア」というふうに、また日本の地図には「満洲」と表記され、外国の人たちにとってこの地域がマンチュリア、満洲と呼ばれるようになります。それがその後の満洲、ここは満洲だよねというものになっていくのだと私は考えております。

(2) 漢人移民の増加

しかし、国境がマンチュリアに入ってきた時代、その後さらに鉄道が敷設されると人口が急増していきます。マンチュリアの人口推移は1898年以降、上昇カーブの度合いがかなり変わっていきます。そして対外貿易も始まって、1907年にはほとんどゼロに近かったのですが、ここから世界市場との関係性が非常に強く出てくる時代になっていきます（図1、図2 / p22）。

それは鉄道がTの字のように、ロシアによって敷設されるわけです（地図5 / p23）。中でも一番重要なのが、T字路の分かれ目のハルビンです。ロシアが作った東支鉄道、中東鉄道（注：中国東方鉄道）、この鉄道がヨーロッパからいろいろなものをマンチュリアの地に運んできました。それは人間だけでなく、考え方もかさまざまなものです。そういう時代へと20世紀になると入っていきます。そしてその後、日露戦争が起こり、元々満鉄というのは長春—大連間ですが、ロシアが作った鉄道を日露戦争の結果、経営権を譲り受けている。ここに日本もマンチュリアの地と非常に密接な関係を持つようになるわけです。

すなわち、20世紀になって主権国家の論理がこの地域にも及び始めたこと、さらに19世紀、20世紀をまたいだ頃に鉄道が敷設されたことによって、マンチュリアの状況は大きく変わっていきます。そういうものを土台にして、この後の1920年代や「満洲国」期の1930年代にはいろいろな人たちがいろいろな活動をしていくということを私は強調しているのです。

そういう中で1911年に辛亥革命が起こり、清朝は滅びるのですが、清朝も20世紀に入ると、八旗の旗人たちは軍事力の中心にならなくなってしまった。軍事力をもっと強い武器を使う人たちになりました。清朝は1907年に、旗人に対して「今後は国民として生きてってください」という皇帝の命令（上諭）を出しました（『光緒東華録』光緒33年8月）。清朝皇帝の命令の中に「国民」という言葉が使われているということで、これは非常に珍しい用例なのですが、清朝も国民というものを考えていたのだなど。それが20世紀初頭になると出てくるのですが、では国民とは一体誰なのかとなると、曖昧としてよく分からないというところですよ。

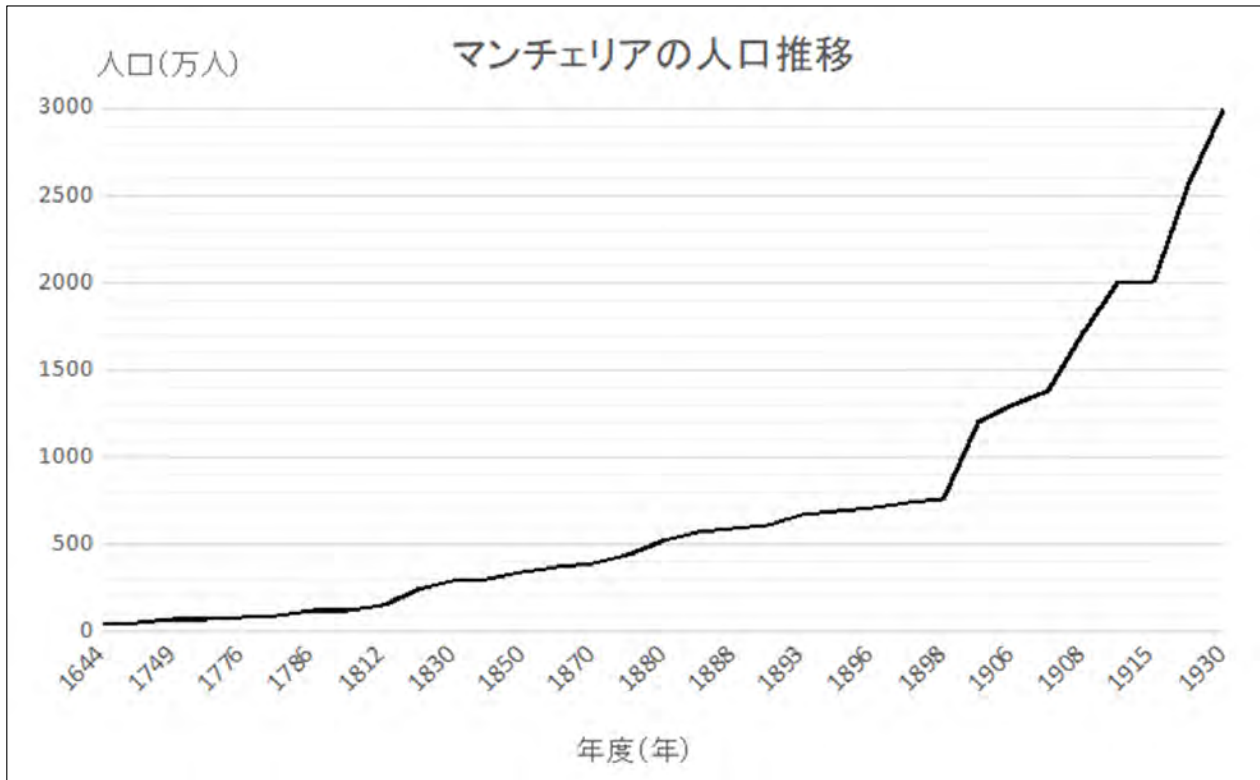


図1

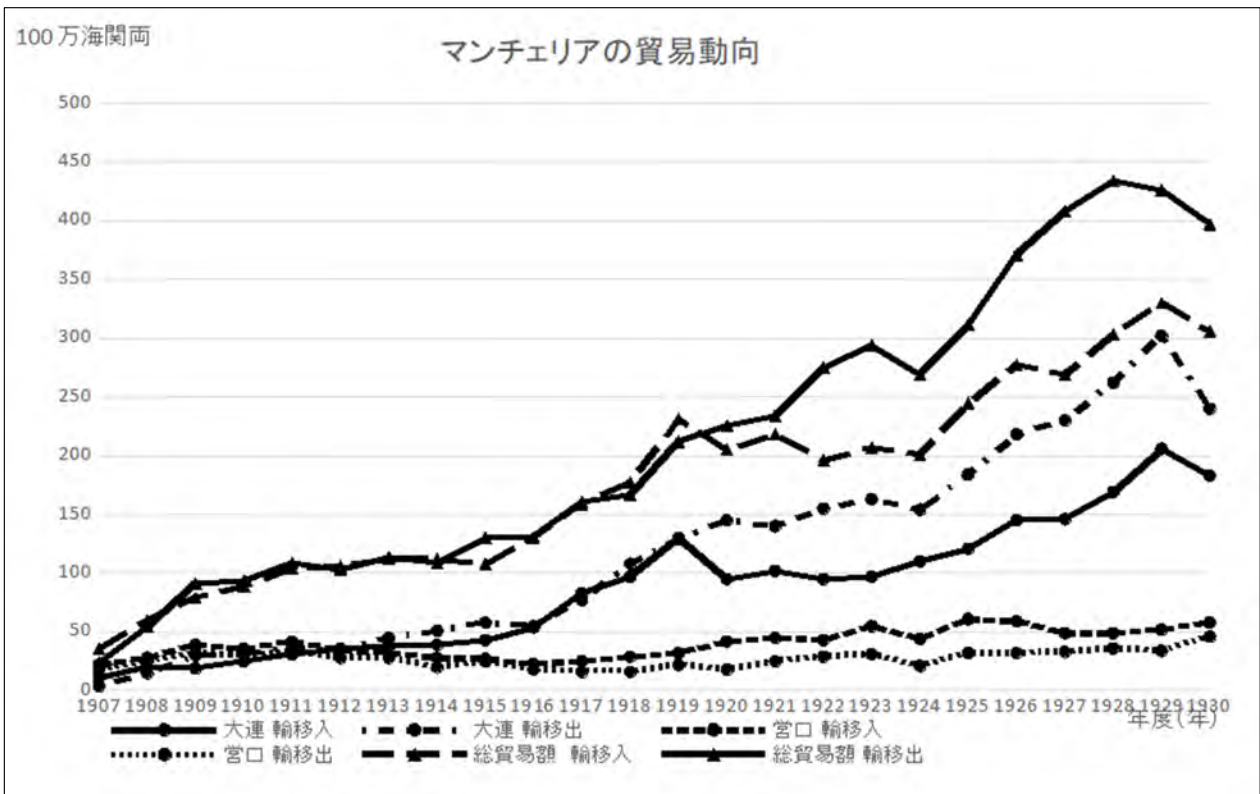
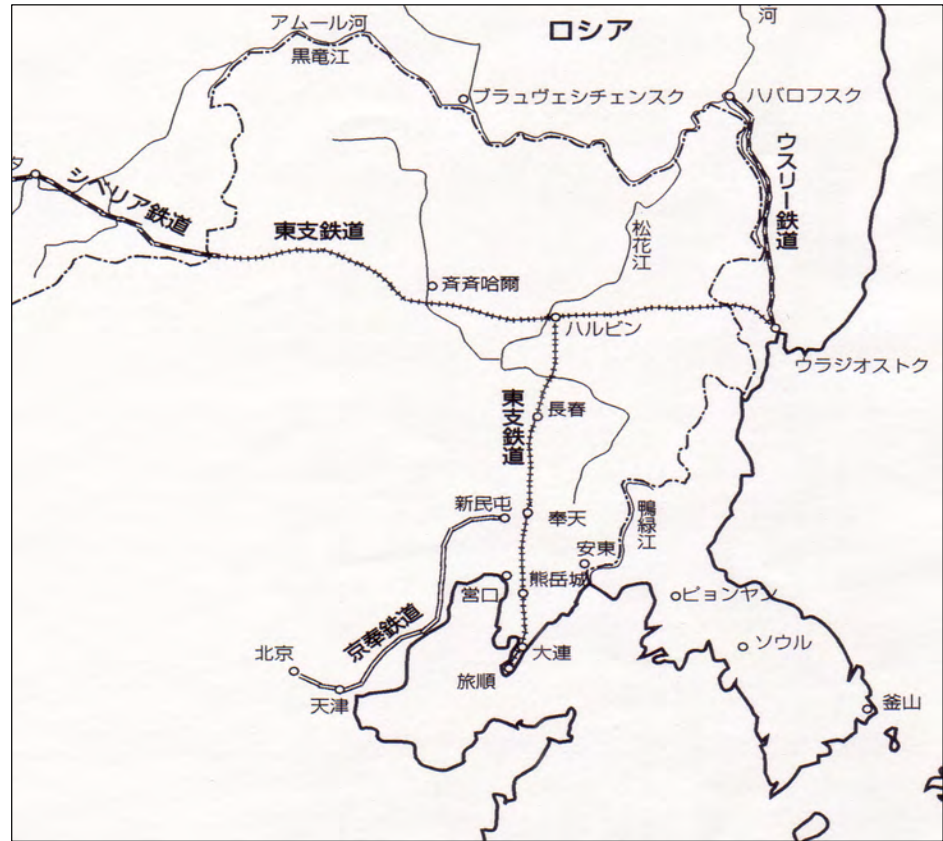


図2



地図5

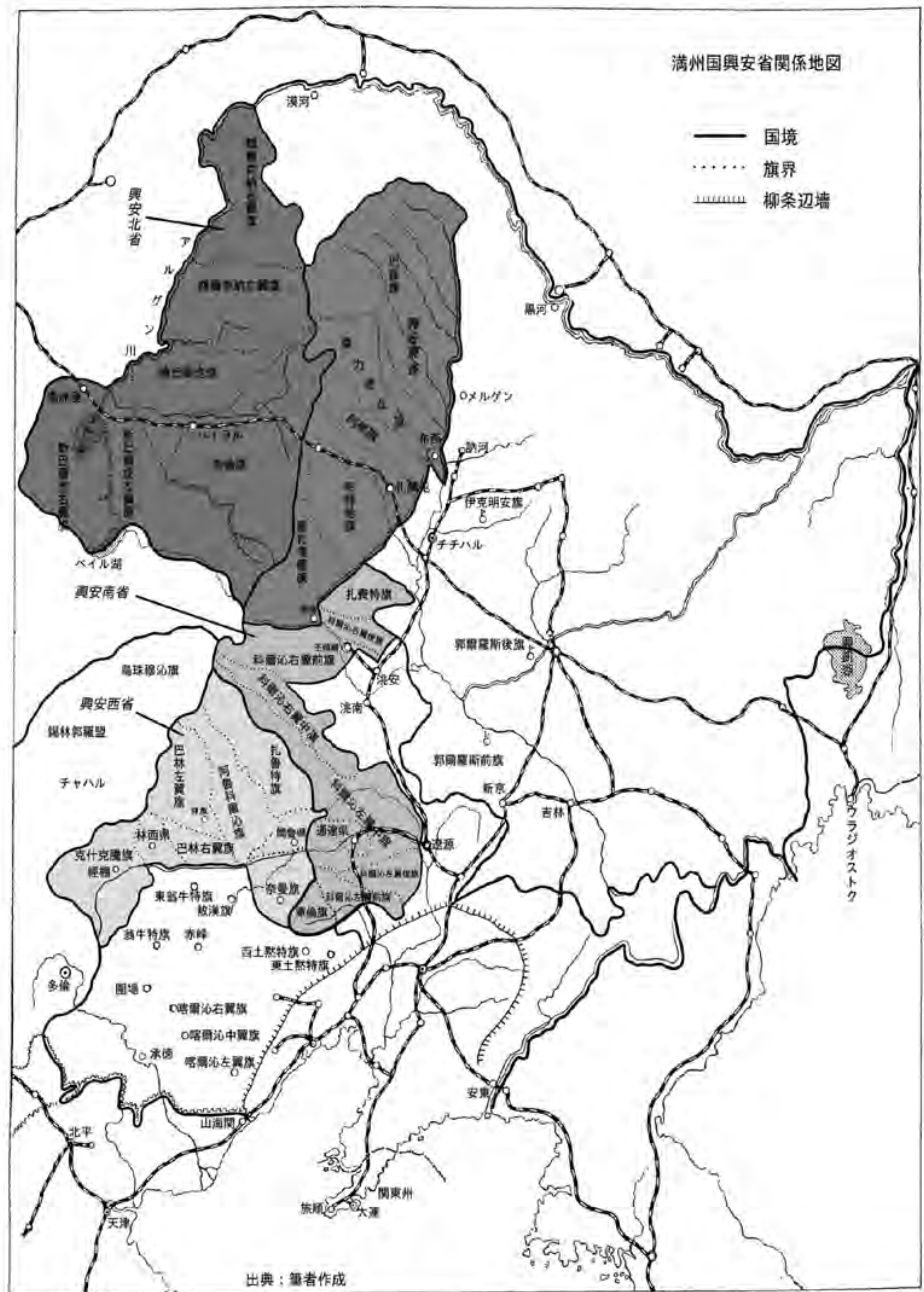
(3) マンチュリア西部に暮らしたモンゴル人の動向

この後のナヒヤ先生の報告にも関わりますけれども、いろいろな人が来る中に、「満洲国」には満洲人、中国人がいるのでしょうか。それはそうなのですが、これは「満洲国」時代の地図なのですが、西部の面積的には広大なエリアは、モンゴルの人たちの住む場所でした（地図6／p24）。

「満洲国」も特別な行政庁などを置いて管理していましたが、モンゴルの人たちは、私の考えによれば、移住して流入してくる漢民族や漢人たち、ならびに「満洲国」の統治という二重のプレッシャーの中でなかなか悩んでいました。清朝があったときにはまだ、漢人移民がやって来ることにどのように経済的に対応するのかという側面が大きかったのですが、清朝が滅亡すると、モンゴル人王公の多くの人たちは、「自分たちは清朝皇帝に服属していたので、中華民国とわれわれは関係ありません」という主張をして、中華民国の主権下に入ることを拒み、自分たちの国をつくらうという動きを示していた人たちもいます。そういう人たちは「満洲国」期も「満洲国」の中で何とか民族的なものやっっていくような動きをしていた人たちもいましたが、それらの動きはなかなか厳しかったということになっていきます。

(4) 中華民国、「満洲国」期の状況

20世紀になりましたので、世界は大きくは民族の時代、主権国家の時代になるわけですが、果たしてマンチュリアに住んでいた人たちもそういう中にいたの



地図6

かなと。民族概念というのはわれわれのような今日的な日本人と同じなのかとかなり疑問に思わせる記述が、1928年に刊行された『岫巖県誌』、岫巖県というのは遼寧省南部にある県ですが、まずその県誌の巻三は「民族」という題名が付いているのですが、その後に「民種」という言葉を使い、高麗系、回系、旗籍、民籍という四つの民族が住んでいると記述しているのです。これは一体何を意味しているのか、どういう発想を背景にしてこういうものが出てくるのかというのは私にはよく分かりません。

そして「満洲国」になるわけですが、「満洲国」になりますと多くの日本人が渡って、住んでいる人たちを観察するのです。そして多くの日本人は、『『満洲国』の普通の農民の人たちは政治的に無関心の人が多い』ということを言っています。史料2をお読みいただきたいのですが、日本人からすると非常に国家観念

が薄い。さらには、国家というものが彼らを保護した経験はほとんどなかったと。であるから、彼らは国家を信用していないということで、「満洲国」の官吏の人たちが農民たちを説得するのですよね。今までのようなものではない、みんな「満洲国」の国民として一丸にならなければ駄目なのだ、そしてアジアを盛り上げていくのだということを「満洲国」の日本人の官吏の人たちは「満洲国」全土でやるのですが、それに対する反応やリアクションはなかなか薄いもので困っているということが多くの報告書に書いてあります。

史料2

「満洲国」がおこなった農村調査をもとに日本人が得た見解

大多数の農民は政治に無関心であり、関心ある者といへどもそれは彼等の狭隘なる生活の経験の範囲を出ないものであって、彼等に直ちに国家人としての自覚を求むるが如きは望み難き事である。之は蓋し当然の事であって、従来彼等の国家というものは彼等の社会の外にあった。屢々交替した彼等の国家は彼等から奪うところが余りに大きく、彼等に与うところは余りに小さかった。代々の国家は彼等を誅求はしたが、彼等の生活を保護はしなかった。代々の国家は彼等の社会的利害と一致する軌道に乗っていませんでしたので、彼等の社会意識は国家意識までは高められず、国家や政治に対する無関心が習慣づけられた。

出典：満洲国実業部臨時産業調査局編『農村実態調査報告書』9巻、1937年

ということは、国家や民族の枠組みを前提にしてマンチュリアという地域を考えていくことはもちろん有効的な側面も多々あるのですが、それだけでよいのか、ということですね。ではどういう枠組みがいいのかというのは正直言って私もよく分からず、私はそれ以外で社会変容というタームを使って、マンチュリアがどのように社会変容していくのかということを書いたのです。それは吉川弘文館から出た『マンチュリア史研究—「満洲」600年の社会変容』で、14世紀後半から20世紀前半の600年にかけてマンチュリアがどのような社会変化をしたのか、1949年まで取り扱っています。

おわりに

そして私の見解、また多くの見解では、中華人民共和国の成立により、東北三省が成立し、マンチュリアという地域は中華人民共和国の中に溶解した、溶け込んだと。本当に100%溶け込んではいないのですが、溶解してなくなったと。東三省、東北三省というネーミングになったと。もはやマンチュリアという地名は地図上からは消えたということになっています。しかし、地図上から消えたとはいえ、別に地域がなくなるわけではありませんで、そこで中華人民共和国の一地域として研究していくというスタンスもあるのですが、私はこういう地域の歴史的な変容に着目して、この地域を研究しております。

そして、きちんとした研究の見解はまだ分かりませんが、私自身の見通しでは1950年代以降、中華人民共和国下のマンチュリアでは、東北三省でもいいですが、社会主義化と国民形成が並行的に進められるようなプロジェクトがかなり強く進められたのだらうなど。そして、近代の主権国家は均質な国民を求めますが、均質な国民というものはいまだもって形成されていない。そういうものを形成することにどういう意味があるのかと。例えば日本にはほとんど日本人しか住んでいませんが、外国のあらゆる国がそうではないのです。

ということで、現在の東三省のことを考える際に、私は14世紀後半ぐらいから考える方がいいのではないかという見解でやっているのですが、そういう見解は20世紀の「満洲国」などを研究している日本史の人から言わせると、なかなかどうなのかと。「満洲を研究するには侵略というものを一番前に据えて研究しなければいけないので、そうしない研究は意味がない」と言われてしまうこともあるのですが、私は別にそれはスタンスが違うから、それはその人の考えかなと思ってやっております。

以上、本日はホメンコ先生から「満洲国」に住んでいたウクライナの人の話を聞いて、私も初めてそういう人たちがいて新聞などに出ていたということを知りました。それはこれまでの日本の満洲研究では全く扱われていない新しい発見であり、研究の大きな前進だと私は思っております。それをより引き立てるために、「満洲という地域はどんな地域だったのか」というところを主体に話してくれ」と言われて、「いいですよ」と。『『マンチュリア史研究』という本に書いたので、その内容をダイジェストで、30分ほどでお話しします』ということで本日の報告を引き受けた次第です。

本日はどうもありがとうございました。



中国東北地域における 近代的な空間の形成

東北蒙旗師範学校を事例に

ナヒヤ

内蒙古大学蒙古学学院歴史系副教授

※所属・肩書は本フォーラム開催時。2023年10月現在、同教授。

皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりましたナヒヤ（娜荷芽）と申します。よろしく申し上げます。先ほどのホメンコ先生のお話なのですが、極東あるいはアジアのハルビンにいるウクライナ人に関する貴重なお話を頂きまして、それから塚瀬先生からは「満洲」という地域の変容について興味深い分析が行われました。それに続きまして、私は「中国の東北地域における近代的な空間の形成」についてお話しさせていただきます。東北蒙旗師範学校という学校がそこに建てられましたが、それを一例にお話しいたします。

本話題で扱う内容は中国の東北地域における近代的な空間の形成という内容です。今、中国の研究テーマの主流にもなっている「交往交流交融（付き合う、交流する、融けあうの意）」の歴史の研究を進めていますが、私のテーマは20世紀前半の中華民国の主権国家の形成過程に組み込まれました外藩モンゴル（外なるモンゴル）に関する話です。一つの事例として、東北蒙旗師範学校を取り上げたいと考えています。

1. 東北三省のモンゴル人

中国のモンゴル族人口は629万人で、内モンゴル自治区に424万人が住んでいます¹。内モンゴル自治区以外に暮らす200万人ほどのうち半数を占める約100万人が、東北三省で暮らしています。そのうち吉林省と黒竜江省のモンゴル族人口はそれぞれ約15万人程度で、モンゴル族人口が最も多い遼寧省には約70万人いるとされています。私が今日お話しさせていただく学校はこの地に建てられています。

遼寧省になぜこれほど多くのモンゴル人が住んでいたのかというと、先ほど塚瀬先生のご発表にもありましたように、柳条辺牆^{りゅうじょうへんしょう}というものがありました。こ

1 『中国人口普查年鑑2020』（上）、北京：中国統計出版社、2022年、pp.26-46。

東北三省の
モンゴル人の分布

出典：ユ・ヒョジョン、ボルジギン・ブレンサイン編著『境界に生きるモンゴル世界——20世紀における民族と国家』八月書館、2009年3月、p.39



の地図は今の東北三省の地図なのですが、北から黒竜江省、吉林省、遼寧省があり、この西側にある黒い影になっている所がモンゴル人が住んでいる所です。

モンゴル族が中国の東北地域にこれほど広範囲に分散居住するようになった最大の要因は、清朝初期におけるモンゴル人部族的配置によるものです。

先ほどの塚瀬先生のお話にも出てきましたように、柳条辺嶺の西側の方にモンゴル人が住んでいました。これがいわゆる清朝時代のジョスト盟とジリム盟です。

民国時代にジリム盟10旗の一部、ジョスト盟5旗の大部分の地域が、東北三省、特に遼寧省に組み込まれました。近代の東北地域は清朝およびその継承者である中華民国の一部であり、そこではモンゴル人が多様な活動を行ってきました。

2. 瀋陽におけるモンゴル人の活動

次に、瀋陽におけるモンゴル人の活動についてお話しします。実は、先ほどホメンコ先生の発表にも出てきたようなハルビン、長春、瀋陽を中心都市とした20世紀前半の中国の東北地域では、モンゴル人も知識人を主体として、文化、教育、出版をはじめとするさまざまな活動を行ってきました。

著名なものとしては、蒙文書社（1923年、出版社、北京）、蒙文学会（1926年、文化団体、北京）、東蒙書局（1926年、出版社、瀋陽）、東蒙書局を基礎に組織された蒙古文化促進会（1928年、文化団体、瀋陽）などがあります。

これらの出版社・団体は1920年代から1932年まで、奉天（瀋陽の昔の名前）のモンゴル人たちの活動のセンター的な役割を果たしてきました。また当時、東

北三省にいたさまざまな人たちがここを訪れて意見交換をしていました。またこれらのメンバーの努力によって、1929年に東北蒙旗師範学校（瀋陽）が開校されました。

実はこれと同じ時代、チチハル（齊齊哈爾）にもモンゴル人の主導による中等教育機関が発足しています。具体的にいうと、黒竜江省管轄下にあったイフミヤンガン旗、ドルブド旗、ゴルロス旗、ジャライト旗などの四つのモンゴル旗が共同で出資し、かつ黒竜江省教育庁の援助を受けて発足した黒竜江蒙旗師範学校です。この二つの学校が、後の時代になると内モンゴルの東の部分に移されまして、興安東省扎蘭屯師道学校の母体となります。

3. 東北蒙旗師範学校

それでは、東北蒙旗師範学校の話に入りたいと思います。以上のモンゴル人による活動は成功したかのように見えますが、これらの団体や出版社はいずれも資金不足による経営難の問題に直面していました。中華民国時代にはモンゴル人は中央政府による資金や援助を受けることができず、経済力がなかったのです。そのため自分で十分な活動を行うことができませんでした。この中で唯一成功したのが東北蒙旗師範学校です。その背景には東北モンゴル人と東北地方政権との妥協・協力関係がありました。

後に東北蒙旗師範学校の校長になるメルセという人がいます。この人は1928年に、コミンテルンの指示により、フルンボイルで暴動を起こして失敗しました。フルンボイルは東北地域の内モンゴルの東の部分です。その後、張学良がメルセに使者を派遣して交渉したことをきっかけに、メルセを代表とするモンゴル人と東北地方政権の協力関係が始まりました。

1928年末ごろになると、メルセは張学良と東北地方政権に東北蒙旗師範学校を建設するように提案し、1929年に張学良の許可を得てその学校を建てました。そこでは多くのモンゴル人と東北地方政権の官僚たちが教師として勤めました。

東北蒙旗師範学校の運営および学内の活動に関しては、私の論文（娜荷芽「東北蒙旗師範学校及びその学報『東北蒙旗師範学校専刊』について」『北東アジア研究』2019年、6期）がありますので省略させていただきます。この学校の卒業生たちは後の時代に多分野に活躍していくのです。

おわりに

中華民国期における中央政府と地方政府の対モンゴル人政策は統一されておらず、特にモンゴル人に対する教育事業は、地方政権とモンゴル人との交渉の中で行われていました。中華民国期は、北洋軍閥政府期と南京国民政府期とに分けられますが、政府による対モンゴル文化・教育事業が本格的に進められたのは、1930年代に入ってからです。

一方で、清末の内モンゴルに近代が訪れたそのときから、モンゴルの政治的指導者たちは近代化を目指して教育や文化問題に取り組んできました。中華民国期に入ってから、その活動は主に有識者やエリートたちによって引き継がれました。しかしこの時期になると、弱小民族となったモンゴル人は独自に強力な文化活動と教育活動を行うのが難しく、各地方政権（軍閥）と取引を行わざるを得ませんでした。東蒙書局や蒙古文化促進会などのモンゴル文化団体の活動、及びそれらを発足の母体とする東北蒙旗師範学校は、その典型的な例です。

この時期の内モンゴルの王公や知識人たちの活動に目を向けると、彼らは瀋陽以外にも北京、南京、吉林などの各地を拠点に、政治、経済、文化、教育をはじめとするさまざまな活動を展開してきました。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

話題提供 2



「マンチュリア」に行こう！

グロリア・ヤンユー

九州大学人文科学研究院広人文学コース講師

皆さん、こんにちは。グロリア・ヤンユーと申します。この場で話題提供させていただくことをとても光栄に思います。私は美術史が専門で、近代日本美術史と建築史、特に植民地の都市空間を研究しております。今日は私が最後の発表者なので、ささっと写真を見ながら楽しんでください。

1. はじめに

ここに二つのポスターの写真があります。1920年代に観光宣伝のために南満洲鉄道株式会社によって製作されたものです（スライド1）。

左には、ジャンクという赤い四角い帆が立てられた木造船が描かれています。

1. はじめに



朝鮮へ満洲へ
1920年代



満洲へ朝鮮へ 旅行は今！
1920年代

スライド1

出典：図録「ようこそ日本へ：1920-30年代のツーリズムとデザイン」（東京国立近代美術館，2016）より

船首に彩色的な模様が描かれています。ジャンクの背景に黒い鉄橋が写っています。川は朝鮮半島と満洲の境界になる鴨緑江で、鉄橋は1911年に完成した鴨緑江鉄橋といいます。朝鮮半島と満洲がつながったランドマークです。

右のポスターには、ショートカットヘアの女性が写っています。チャイナドレスを身にまとった女性が扇子を持って立っています。周りに白いアカシアの花が咲いています。後ろの青空に野原が遠く続き、遠景に白い塔が描かれています。この塔は遼陽の白塔です。アカシアは大連の代表的な花で、5月に一斉に咲きます。女性は奉天の芝居屋の女優さんの格好をしています。ここに描かれたのはいずれも戦前、満洲と朝鮮の旅における景観的な見物です。今日のお話はここから始めます。

2. 満洲観光の成立と発展

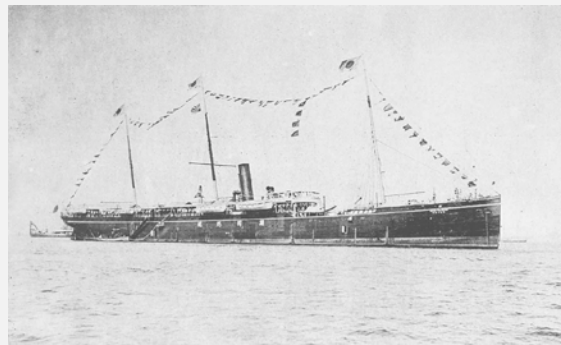
1920年代、日本から満洲・朝鮮への旅は既に盛んであり、ポスター、旅行案内所、絵はがき、雑誌、パンフレットなど、視覚資料も数えられないほど作られました。今日はまず、先行研究を踏まえ、満洲・朝鮮への観光旅行の成立と発展、そして視覚表象について紹介いたします。その後にディスカッションのための話題提起として一つの資料を取り上げます。

近代満洲の日本人の観光は、1906年に東京・大阪両朝日新聞社が主催した「ろせった満韓巡遊」ツアーと、文部省と陸軍省が合同で主催した満洲修学旅行が最初です（スライド2）。いずれも大規模な団体旅行です。ろせった満韓巡遊は、船員と朝日新聞社の取材記者を含め全部で500人を超えました。満洲修学旅行は、日本全国の中等教育機関以上の学生と教員3694人が参加しました。

満洲での見学ルートは、日露戦争の勝利によって日本の支配になった満洲の南部を巡り、特に日露戦争の戦跡が中心でした。陸軍から交通費や宿泊費、食事など

2. 満洲観光の成立と発展

- 1906 「ろせった満韓巡遊」と満洲修学旅行
- 1907 南満洲鉄道株式会社（満鉄）の成立
- 1910s **交通ネットワークの建設と整備**
朝鮮・満洲・ロシアの鉄道連結
（航路網）
- 旅行会社の成立**
ジャパン・ツーリスト・ビューロー
（1912 JTB）
鮮満案内所（1918）



1906年の満韓巡遊 ろせった丸

スライド2

出典：「ろせった丸満韓巡遊記念写真帖」より（国会図書館蔵）

全て支給され、観光案内や講演も提供されました。歴史学者の高媛氏によれば、このような満洲観光旅行は日露戦争の戦勝が生み出したものといいます。日本帝国の勢力範囲を実証するものとして、その帝国民としてのアイデンティティと自覚を深めました。この時期の満洲観光は、観光環境がまだ整備されていないため、修学旅行中に病死した学生も数人いたという決して快適な旅ではありませんでした。

1907年、半官半民の南満洲鉄道株式会社（満鉄）が大連で整備され、日本の満洲経営が本格的に始まり、鉄道を建設し、鉄道附属地も続々と開設されました。1910年に入り、日本帝国の拡張によって満洲観光の事業が躍進的に発展し始めました。

その前提は二つあります。一つは朝鮮・満洲・ロシアの鉄道交通ネットワークの建設と整備です。1905年に日本が京釜鉄道を開通し、その翌年に京義線、つまり今のソウル（京城）から新義州までが開通しました。1907年に南満洲鉄道と京釜線、京義線を接続し、釜山から長春の直通運転ができるようになりました。さらに1908年から日本とロシアとの連絡運輸の交渉が始まり、1911年、南満洲鉄道とシベリア鉄道の連結ができました。同じ1911年に、スライド1の中にも描かれていた安東から新義州の間の鴨緑江の鉄橋が完成し、安東から奉天までの安奉線と京義線をつなげることができ、朝鮮と満洲を直結する重要なルートになりました。1913年によく日本、朝鮮、満洲、ロシアの交通網を世界中の交通網に結び付けることができ、日本から京義線、満鉄、シベリア鉄道を經由し、ヨーロッパまでの旅ができました。そして世界周遊券、東半球周遊券、シベリア経由周遊券などが発売され、1916年にはロンドンから東京まで2週間で旅をすることができました。

もう一つは、専門的な旅行会社・機関の成立です。1912年、半官半民のジャパン・ツーリスト・ビューロー、つまりJTBが大連に設立されました。外国の観光客を誘致する機関として日本国内、朝鮮、台湾、満洲の主要駅に案内所を開設し、鮮満旅行の情報、交通切符の販売やホテルの手配、事業者間の連絡・調整などを担当しました。JTBのほか、1918年に満鉄が東京に鮮満案内所を開設しました。

当時の観光を知る手がかりとして、洋画家の北蓮蔵が描いた、満鉄の世界ツアーの宣伝ポスターがあります。電車に座っている和装美人が描かれ、女性ははやりの二百三高地髷をしていて、華麗な柄の着物を着用し、手には満鉄のロードマップが入った扇子を持っています。二百三高地髷というのは、日露戦争の激戦地であった旅順の203高地に由来しています。豪華な内装を持つ電車の窓からカーテンを通して外を眺めると、遠景にタマネギのようなドームが特徴的なロシア正教会を思わせる建物と、屋根が反っている中国風の建物が見えます。その手前にある、夕日を反射している川はウスリー川と見られ、異郷、つまりハルビンの雰囲気が漂っています。その下には大連港が描かれ、船と電車が並行に描かれたということは、交通の便利さを強調する画家の創作だと思われます。

このように1920年代から交通の整備と旅行ルートの発展により、満洲と朝鮮の観光ブームが始まりました。さまざまな観光ルートが開発され、また当時の定番・名勝も定着しました。さらに1932年以降、「観光楽土」の政策が打ち出され、満洲観光の最盛期を迎えました。

3. 満洲観光の視覚表象

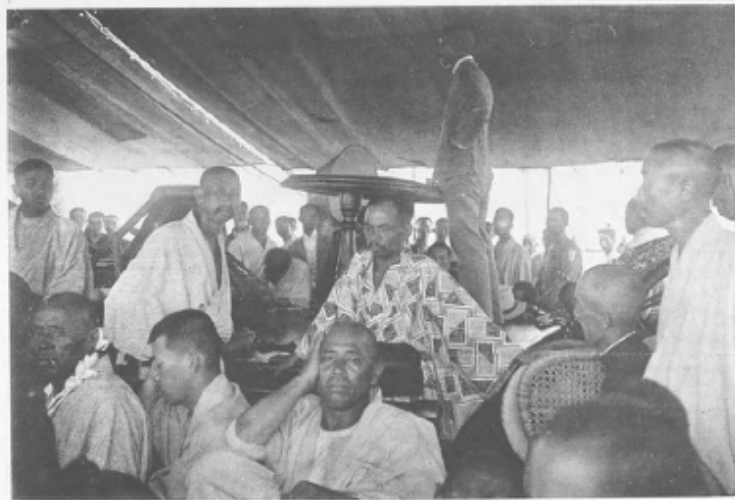
満洲観光に関するビジュアル資料はとても豊富です。JTB、満鉄、朝鮮総督府、台湾総督府、船会社などによって製作されたポスター、パンフレット、ガイドブック、映画、観光案内所、観光地図、雑誌、グラフ誌などさまざまあります。さらに、満鉄は積極的に画家を登用し、彼らの手によって満洲・朝鮮の風俗・人物などにモダンかつ良好な様相を加えました。

特にここで指摘したいのは、都市空間、民族衣装、装飾など、華やかで空想的な様相が伝わることです。既に指摘されたように、民族衣装を身にまとった満洲美人や朝鮮美人と異郷の風景の表象には、植民地支配者の男性から植民地の女性に向けるファンタジー的、性的な絵図、また近代的な文明と植民地の風景の対照など、日本帝国のまなざしが構築されています。

4. 話題提起

最後の話題提起に入りたいと思います。満洲の観光研究は、日本の「非公式」帝国都市の支配とその動態を明らかにしています。また、視覚表象によって構築された満洲のイメージと現実のずれもたびたび指摘されています。なぜなら、写真、絵はがきなどの視覚資料は、その内容、構図などに、日本帝国の支配地域への排除的、また差別的なまなざしが内在しているからです。それを帝国の視覚表象のフレームと私は名付けています。

ただ、ここには面白いことがあります。1906年のろせつ丸満韓巡遊は大人気を博したため、朝日新聞写真班が撮った約150枚の写真を収録した『ろせつ丸



斉藤の講演

スライド3

出典：「ろせつ丸満韓巡遊記念写真帖」より（国会図書館蔵）

『韓巡遊紀念写真帖』という写真帖が出版されました。写真帖を見ると、朝鮮と満洲の風景と風俗、そしてスーツとカンカン帽子を着用する乗客のグループ写真、また現地の公園やにぎやかな歓迎会などの写真が並んでいます。こういった写真の内容は、先に申し上げた帝国のフレームに従っていますけれども、不思議な写真もあります。

1枚目は、「斉藤の講演」というタイトルです（スライド3）。一見すると浴衣姿の中年男性たちが座ったり立ったりしている混乱の中、講演者がどこにいるのか分かりません。前景にいるカメラをぼーっと見つめる男性たちは、画面中心の講演者より注目を集めます。他の写真に写っていたスーツとカンカン帽子を着用する紳士たちと同じ人とは思えません。このような写真は帝国支配者のイメージを台無しにします。

もう1枚は、「大連の歓迎会」というタイトルの写真です。大連は1899年からロシアによって建設され、1906年ごろには既に近代的なロシアの町になりましたけれども、ここでロシアの町と建物を避け、公園での歓迎会の写真が選ばれました。ここには極めて興味深い情報があると私は思います。ここに和装の日本人婦人が写っています（スライド4）。実際、日本人婦人が満洲を訪ねたという観光的な視覚表象は1920年代後半に登場し、「満洲国」が成立した後にたくさん出ています。ただ、1920年まで、あるいは1906年にはほとんどありません。ここに写った日本人婦人たちは一体どのような人でしょうか。

ツアーに参加した記者によると、この宴会を盛り上げるため、「三四十の大連芸者が座間に奔走するあり……」と書いています。「芸者」と呼ばれる彼女たちにはいろいろな名称があります。芸者、娼婦、酌婦、売春婦、醜業婦などです。彼女たちに関する研究は、文献記録に基づいて倉橋正直、柳沢遊、塚瀬進先生によって明らかにされています。つまり、日露戦争の前後、満洲の在留日本人の

「三四十の大連**芸者**が座間に奔走するあり」

、 、 、 、

芸者、娼婦、酌婦、売春婦、醜業婦



スライド4

出典：「ろせった丸満韓巡遊紀念写真帖」より（国会図書館蔵）



スライド5 大連 1905年 日文研所蔵地図に筆者が加筆し作成。

中、女性の半分以上は売春婦で、大連をはじめ全ての都市の料理屋は女郎屋といってもよいほど数が多いのですが、このような職業を持つ女性は帝国視覚の表象の中に挙がっていません。そして同じ時期に満洲修学旅行の学生たちも、彼女たちを日本帝国の国辱とし、帝国の権威の恥であると罵倒しました。

ただ、ここで美術史の視点から見ると、この写真は若干複雑な立場に写っています。つまり、堂々とグループ写真の中に入っているのですが、これはなぜかというのはいかならないのです。一つの推測を申し上げますと、研究によって明らかにされたのは、多くの日本人売春婦は中国人の現地の有力者を顧客としたため、お金と権力を持っていました。そして当時、現地の日本人男性たちもお金と権力を目当てにこの女性たちを厚遇しました。また、もう一つ明白なのは、帝国の視覚表象のフレームはしょっちゅう変わっていて、そして定着したのは1930年代後半ということなのです。

これは1905年の大連の地図なのですが（スライド5）、線路下の楕円で囲んだところは、女郎屋です。そして左下に楕円で囲んだ青い線のところが公園で歓迎会が開催されています。線路上の小さな楕円の部分が元々ロシアの建物で、大連クラブという建物なのですが写っていません。1906年はちょうどタイミングが良く、そのとき軍政省あるいは民政省は、全ての女郎屋を集めて、都市から離れた所に移そうとしているのです。見ると観光空間と生活空間を分別しようとしている努力が見られます。

最後になりますが、「満洲」という国家は多層的であって、観光空間と日常生活の空間が重なった所や分かれた所が散在していました。そして、その視覚表象は1906年当時はまだまだ定着されていないということが明らかになっています。つまり帝国のまなざしの中にも揺らぎがあったということです。

ご清聴ありがとうございました。

自由討論

モデレーター：マグダレナ・コウオジェイ

(東洋英和女学院大学准教授)

論点整理：オリガ・ホメンコ

(オックスフォード大学日産研究所所属英国アカデミー研究員)

塚瀬 進 (長野大学環境ツーリズム学部学部長)

ナヒヤ (内蒙古大学蒙古学学院歴史系副教授)

グロリア・ヤン ユー

(九州大学人文科学研究院広人文学コース講師)



コウオジェイ それでは自由討論を始めたいと思います。まずは発表された先生方から他の先生方への質問やコメントなどを、発表した順番でお伺いしたいと思います。まずホメンコ先生からお願いします。

ホメンコ ありがとうございます。あまりないのですが、ヤン先生は、あの広告やポスターはどここの資料館で見たのでしょうか。満洲の満鉄の広告はどここの資料室で見たのですか。アメリカで、それとも日本？

ヤン 東京国立近代美術館に収蔵があり、今日お見せしたポスターも同美術館の展覧会で見たものです。その図録の中に収録されていました。

コウオジェイ 続きまして、塚瀬先生、お願いします。

塚瀬 本日は多様な側面からいろいろなマンチュリアのことについての報告を聞くことができて、大変私も勉強になりました。私もまた同じでヤン先生への質問なので恐縮なのですが、最後で問題提起をされていた、要するに当時の写真やポスターはもちろん目的があって作成されたものであり、それがどのような目的から

作成されたのかというのは、写真やポスターをみただけでは、そこには書いていないものなのです。でも、それはどういう方向へ、どういうイメージへと見た人を誘うというか、イメージさせるのかということに重点を置いて作られているものである。それは現代のものも全くそうだと思います。

ですから、影響力やポスターの斬新さにわれわれはだいぶ驚かされて、大変興味深く思って、こういうのが作られていたのだというふうに思うのですけれども、それは歴史資料として使うときですよ。どれだけ影響力があったのか。影響があったのは間違いありません。どれだけ影響力があったのかという問いを立てたときに、それに答えるにはどのような内容、方向で答えるのかというのが現代の美術史や都市空間研究においては行われているのか伺いたいのですが。

コウオジエイ お願いします。

ヤン ありがとうございます。非常に重要なポイントをご指摘いただきました。まずポスターが歴史資料として客観的に使えるかどうかという質問ですが、都市空間研究でも類似している問題があり、それは地図です。地図にも同時代のさまざまな観点や思惑が含まれていて、時には実際には存在しない建物が描かれているという状況も多いので、客観的な資料だとは安易にお答えできません。今日見せたポスターも全て満鉄が制作したものですから、満鉄以外の観点は含まれていないのです。事実、1906年の写真帖の序章には、それが満洲旅行の記念写真集として参加者の集合写真を入れたお土産品であること、また当時の満洲を観光地として大衆に紹介する目的を含んでいるとの記載が見て取れます。

こうした点をふまえ、私は写真や地図など一見すると客観的に見える歴史資料も、実は全く客観的ではないと考えています。ですから、美術史の専門家としての仕事は、地図や写真などの視覚的な構造（visual format）を分析することで、それに内在されている誘導的な視点、すなわちそれがどの時代のどのような人々へ向けて作られたものなのかを明らかにすることだと考えています。どこかに明記されているわけではないので、それを割り出すのは大変難しいのですが。

ホメンコ ヤン先生のご発表で、広告が実際にどれだけ影響したかということについては証拠がないというか、どうやってそれを検証すればいいかという疑問を持ったのですが、例えば発表の中で提示されたポスターはあくまでも鉄道の宣伝媒体ですよ。そうすると満鉄は多分資料をすごく大事にしているはずなので、乗客の人数に伸びがあったという記録もあると思います。おそらくそれが証拠になるのではと思います。

コウオジエイ ありがとうございます。続きまして、ナヒヤ先生にコメントをお願いします。

ナヒヤ 私の簡単な感想なのですが、3人の先生方のご報告を聞きまして、まずホメンコ先生のご報告なのですが、土地、自由な生活を求めて、ウクライ

ナ人が東北地域あるいは極東に来たことを初めて聞きました。私は中国の近現代史を専門としているのですけれども、近現代史ではロシア人とひとくりにしまして、アムール川に沿ってロシア人は極東地域へ来ましたというふうに紹介されているのですが、その中にこんなに多くのウクライナ人がいて、しかも自分のコミュニティをつくって、協力し合って、多様な活動を展開してきたということについては、今日は本当に初めての話で、知的な刺激を受けました。とても興味深いです。

塚瀬先生のご発表なのですが、「満洲」という地域の変容について四つの時期に分けて分析されていました。とても興味深いのが、「満洲」という「言葉」或いは「思想上の地域」が地図上から徐々に消えていく、また徐々に東北三省に変えていくという過程をととても興味深く分析していました。ありがとうございました。

ヤン先生のご発表なのですが、満鉄が作った多様なポスター、観光に関する視覚の資料を使われまして、一番興味深いのが、日本帝国時代のまなざしの中にも揺らぎがあったことについて問題提起をされまして、興味深く思いました。

私も一つ、ヤン先生に質問があります。当時は、先ほど挙げられました資料以外にも実は絵もありました。画家の描いた絵がありまして、しかも当時の例えば日本人が蒙疆と呼ばれた地域に行きまして、多くの著名な画家たちが生まれました。彼らは本当に自分の時代を謳歌するような、とても熱情にあふれた絵を描きました。第二のふるさとと称する絵もありますが、それに関するヤン先生の考えをお伺いしたいと思います。

ヤン 個人的考え方ですが、1932年ごろはかなり大きな境目だと見ています。それ以前はまだ「満洲国」が成立していないので、ある意味で若干自由があるというか、たくさんの方が各々赴き、現地で描くことができ、政治や文化においても多くの視点があった。一方で1932年以降は、かなり強い政策が始まりプロパガンダや視覚表象の影響を受け、その当時の人々の描く絵、またその文脈も変わったと思います。これについてもおそらく司会者のコウオジェイ先生がお答えできると思います。帝国という美術史、帝国の美術界にも関わる質問でもあります。

コウオジェイ 大丈夫です。ヤン先生からの質問と感想をお願いしたいのです。全部美術史の話になると大変です。

ヤン 今日は私にとってとても勉強になりました。美術史もしくは建築史では未だに「満洲国」に注目が集中しがちであり、その中で日本人と中国人というように二分して論じる傾向が続いています。ですが近年進むさまざまな研究の中で、特にモンゴル人の地域社会やより多様な人々についての研究も始まっていますね。時間や場所をもっと細かく分別し、細かく研究することはとても役に立つと思います。

ナヒヤ先生に伺いたいのですが、モンゴル人の地域社会あるいはコミュニティ

についてはどのような層やグループがありますでしょうか。例えば社会階級について、農民が多いとか。

ホメンコ先生にも伺いたいのですが、例えばウクライナ人もさまざまな仕事をしています。今まで紹介されたのはかなり知識人という感じを受けましたけれども、コミュニティの中の他の層（グループ）、例えば農民がどのぐらいのプロポーシオンがあるか教えていただきたいのです。

ナヒヤ ご質問ありがとうございます。民国時代でよろしいですか。民国の時代というのが、1912年に清朝がつぶれて、1912年から1949年までを民国時代といいます。この時代には清朝時代の王様もいました。王様を民国時代には王公と呼びます。それが一番上の人たちなのですけれども、彼らが政治的な指導者です。そして、1920年代から30年代にずっと続きまして40年代まで知識人階層が育ちました。この中から、先ほども申し上げましたが、学校から卒業した学生たちが官僚になったり、エリートになったり、彼らも次の時代、1930年代もそうですし、1949年以降にも内モンゴルの官僚として、知識人として仕事をしてきました。私は今日は主に知識人やエリートの人たちを取り上げましたが、それ以外にも農民、牧民、僧侶等もいます。

コウオジエ ありがとうございます。では、ホメンコ先生、お願いします。

ホメンコ そうですね。とても良い質問です。1917年、1918年あたりに民族運動が活発になったときに、私も知識人というか、インテリというか、上の階層の人たちを紹介したのですが、なぜかという、社会活動に関わったのは大体そういう人たちが多くからです。でも、それ以外の大多数は農民と商売をやっていた人たちもあって、極東ではもうその頃にはかなり成功してきた人も出てきていました。一方、満洲やハルビンでは少し違って、そこではまず鉄道事業を重視していた人々、そして商人、会社員、農民、実業家などが存在感がありました。1922年頃にはウラジオストクからだけでなくヨーロッパから駆けつけたいろいろな階層の人々が住んでいたと思われまます。

第二次世界大戦が終わる頃の記録には、中国や満洲から逃げてきた人々が上海へ流れ、さらに海外へと移動したという記述が残っています。パスポートを発行した記録をまとめたある資料には、本当に様々な職業、それこそ音楽家、靴職人、技師などピンからキリまでのウクライナ人300人とその家族たちの生業が記載されていてとても興味深いです。

ヤン もう一つの質問は、塚瀬先生に教えていただきたいのですが、歴史資料の扱いについてです。先生の『満洲の日本人』という本を私も拝読して、たくさんのインスピレーションを頂いたのです。その中に記事や統計の数字もあり、私が一番気になったのは、例えばこの本は1931年ぐらいのことを書いていて、その中に1905年ぐらいのことにさかのぼって書いてあるのですが、こういう歴史資料の扱いについて、私は訓練が足りないので先生にいろいろ教えて

いただきたいのです。その辺について、歴史資料のさかのぼって述べたことについてどうやって扱ったらよいでしょうか。

塚瀬 大変大きい質問で、このようなところですぐに答えることはなかなか難しいですね。歴史資料にはいろいろなものがありますが、私は主に新聞と雑誌を使っただけです。新聞は読者を意識して当然記事が書かれます。雑誌もそういうものです。ですから、どうしても日本人が、私は大連や奉天などで発行されていた新聞や雑誌を使っただけですけれども、そういう記事はやはり住んでいる日本人に向かって発信している情報が非常に多くて、住んでいる中国人に対しては別段、そういう読者もほとんどいなかったと思うのです。

ですから、そういう日本人の新聞や雑誌からは、日本人の姿は結構拾えますけれど、中国人の姿は拾えず、さらに日本人が中国人をどう思っていたかというのはなかなか拾えず、でも私はそういうところをうまく狙って、中国人についてこのようなイメージを持っているのだというところに注意して書いたつもりなのです。

でも、それは危険だなと思ったのは、戦前の満洲に暮らした日本人が中国人をどう思っていたのかというのを再現したのですが、それはもう少し言うと、戦前の日本人の対中国人観を単純に再生するようなところにつながることはならないように注意したのですが、どれだけうまくできたのかというのは疑問だということが現在の私にはあります。ちょっとお答えになったかどうか分かりませんが。

コウオジェイ 先生方、ありがとうございます。これからは今日のフォーラムをお聴きくださっている皆さんから質問を受け付けたいと思います。一つここでお断りしたいことがあります。今日は先生方のご発表の内容に対するご質問だけを受け付けます。それ以外の質問にはちょっとお答えできません。また時間が限られているので、皆さんにご発言していただけないかもしれませんが、あらかじめご了承ください。

会場参加の方も、オンラインで参加されている方も、皆さん手を挙げていただければとお願いします。オンラインの方はオンラインの機能がありますので、そこをクリックしていただければと思います。私が皆さんをお呼びしますので、オンラインの方はそのときにマイクを使ってお話ししてください。そのときはぜひカメラもオンにしてください。よろしくお祈りします。会場の皆さんも、オンライン参加の皆さんも。

手前の座席の方、お願いします。質問する方はぜひこちらに出てください。そうするとカメラにも写りますので。

フロア1 報告された4人の先生方、大変新鮮で詳しいお話をありがとうございました。モデレーターの方にも感謝いたします。私はジャーナリストです。帝政ロシアやソビエト連邦の歴史に関心を持っておりますので、ホメンコ先生に二つ質問させていただきます。

一つは1918年の段階で、「緑のウクライナ」という運動の中で知識人と農民がどのように関わり合っていたのか。今日のお話を何う限りにおいては、やはり知

識人が主導した運動であったような印象を受けます。そういう意味でこのムーブメントは大衆的な広がりを持ち得たのかというのが一つです。

もう一つの質問は、1917年のロシア革命から1922年のソビエト連邦の成立に至る内戦の時代に、「緑のウクライナ」はどのような運命をたどったのか。つまり、帝政から共産主義体制に移る歴史の激動の中で「緑のウクライナ」がどのように変遷して、どのような方向に向かっていったのか、教えてください。

ホメンコ ご質問、どうもありがとうございました。確かに緑のウクライナで起きた運動はどちらかという知識人が主導した形と言えます。ただ、農民も折に触れてお金を出したり、学校では先生たちが生徒にウクライナ語を忘れないように教えたり、盛んに発行される新聞を読むことで誰もがいずれ元々住んでいた地域に戻っても違和感なく再び地域に溶け込めるように、という気概で運動に参加していたと思います。

二つ目のご質問についてですが、「緑のウクライナ」がどのような運命だったかということ、非常にこれは難しい運命と言わざるを得ません。極東は多くの運動が重なる場所として、シベリア独立派や極東共和国など様々な活動が同時期に見られました。ウクライナ人はまず運動の先頭に立つリーダーが自分の居場所を見つけるためにいろいろな苦勞をし、第4集会が1918年に終わって、第5集会を予定していたにも関わらず外からの圧力に押されてできなかったのです。第4集会で憲法のドラフトを作り、周辺国の大使館に呼びかけもしたのですが、外部からの圧力によって抑えられたという感じです。特にスイットが1938年にハルビンで書き終わった本の中にそのストーリーがかなり伝わっています。彼は緑のウクライナ運動が外圧や内部分裂によって解体していく経緯を観察しています。団結力を削ぐために思想的な勧誘をしたり、賄賂を横行させたりなど、あらゆる手を使いついに緑のウクライナの解体に成功します。みんなもう少し一緒に活動すればよかったのに、と思わずにはいられません。結局、1922年になるときに運動を引いていたリーダーだけが国外に逃亡します。非常に複雑な運命ですね。

コウオジエイ ありがとうございました。後ろの方、お願いします。

フロア2 本日は先生方、ご発表ありがとうございました。主にホメンコ先生への質問です。「緑のウクライナ」運動を満洲で展開しているときに、キーウの方で独立宣言したウクライナがなくなってしまうわけですけど、緑の運動をしていた方はいずれキーウなどに戻れなくても、ウクライナという民族全体がずっとここにいていいというふうに考えていたのか、それともいずれソ連からまた分離・独立するようなことがあれば戻りたいというふう考えたのか、キーウがなくてもウクライナが成立すると考えたのかどうか。

それに関連して、ウクライナ正教の寺院がありますけれども、ウクライナ正教もキーウの中心の強化につながっていなくても成立できると。独立のウクライナの満洲の地における新しい宗教や教会独立運動というのがあり得たのか、それとも僧侶やプリーストは向こうから派遣された人が来ないと駄目だと考えたのか、

そこを教えてください。

ホメンコ とても良い質問をありがとうございます。今日はあまり深い話をしなかったのですが、すごく簡単にまとめると、1917年に首都はキーウと決まります。1930年の段階では国はもうないですね。その間1917年から1932年までにかかなりのネットワークができたのです。海外に亡命したウクライナ政治家、社会活動家、いろいろな人とやりとりをしているのです。つまり、ウクライナはどこにあるかと考えると、ウクライナ人が住んでいるあらゆる所にある。その一つが満洲でした。一方で国づくりができるのはウクライナ人がたくさん住んでいる「緑のウクライナ」ではないかと期待していたのです。そのためにいろいろな活動をしていたのです。

それで正教の話なのですが、完全に独立です。プリーストが何人かいるのですが、極東からハルビンに移った人です。最初はロシア正教だった人でも、マンチュリアに移ってからウクライナ語でミサをするようになって、1926年にウクライナ語の祈りの本も出版しています。その言語を分析すると、やはりウクライナ中部のウクライナ語です。だけど、本部のウクライナ、また海外にいるウクライナ人もやりとりがあります。例えば、キーウからセルビアに行って勉強した人がロシア正教会のトップの1人にもなっています。後に彼は上海に来てウクライナ人ディアスポラと結構やりとりしています。ウクライナ出身の人ですね。ロシア正教会ですけども。やはり独立してやらないと駄目だということが分かっています。

また私の論文の主人公のスウィットのおじさんは、ハルビンのウクライナ教会の2番目のプリーストになるのです。その教会の話もすごく面白いです。当時のハルビンに住んだ人の日記を読むと、ウクライナ教会に行くと、彼はウクライナ語でミサをしているが、なぜかロシア王室の写真も飾っていて、信者には疑問を持たれる。聞くと、過去ですからあっても構わないと言う。つまり、変化する時期において人の考え方も移り変わっていたことを表しているのかもしれない。

だから、そういういろいろな国境線がある、いろいろな民族文化と接触する所に住んでいて、しかも時代は非常に変わり目だったではないですか。国も存在していないから。だから、ある人はずっとウクライナ人と言い続けたのですけれども、別の人はそうでもなかった。

でも、教会の人は大体1回決めたことでずっとやり続けていました。

コウオージェイ はい、お願いします。

フロア3 まず一つ目の質問です。「緑のウクライナ」をつくろうとした人たちは、19世紀の合同移民ということで、19世紀の後半にやって来た方々が中心になってつくろうとしたのでしょうか。それ以前にコサックがありまして、ザポロージャとか、ロシアといえばクバンとかあるのですが、そういうことで辺境に来たのがウクライナ系の人も昔いたと思うのですが、こういう人たちはコサックという形で革命のときもいましたけれども、そういう人たちが参加したり、協力関係という

のはあまりなかったのでしょうか。

それから、ウクライナの言語の使用についての質問です。やはりロシア帝国では、辺境といえども基本的にはウクライナ語での出版は許されなかった。それは、1905年の革命後に一部止められて、本格的にできるようになったのはロシアの革命後ということだったのでしょうか。

ホメンコ ありがとうございます。コサックの話ですけれども、どうも一番最初にシベリアに住んだウクライナ・コサックの人が1人いるのです。デミヤン・ムノゴグリシニーイというコサックの団長ですけれども、その人はロシア帝国にとって暴動を起こしそうな人だったのでシベリアの刑務所に送られたのです。そこを出たときにはかなりの年で、帰れなくて、多分そこで地元の人と結構コネクションもあったので、実はネルチンスク条約に関わったことがあるのです。そこから歴史があるけれども、実際はウクライナ系の人はどうも13世紀に初めて来るようになるのです。それはスウィットの説ですけれども。

革命のときにコサックの人たちが関わったかという質問ですけど、その地域に社会階層ではなく自分たちが一つの民族だと思っているのは、ザバイカルのコザックという人たちです。すごく面白いのは、私も1937年の地図が見つかったときに、そこで住んでいる民族が記入されていて、それでザバイカルのコザックというのは民族だったのか、という感慨を持ちながら見ていたのですが、彼らはそう思っていたのです。シベリア独立派もそうですね。シベリアに来ていろいろな文化の影響を受けても、自分はシベリアの人だと思っていて、そこが運動の派生地になるのですけれども、ザバイカルのコザックもいろいろ協力関係がありました。最初から考え方として少数民族でみんな固めようという動きがあったのです。だから、ウクライナ人に同じ目的を持っていて、個人独立と自治体独立ということを目指していたのです。実は、シベリアの少数民族はその当時のキーウの政府とのコネもありました。

出版活動は、1863年にウクライナ語は出版活動に使えないという法令が決まってから、活動は全部ガリツィア、西ウクライナに移るのです。そこも駄目になったら今度は、初期の思想関係の雑誌をスイスで出すようになるのです。この法令が本当に緩められたのは1905年以降ではなくロシア革命以降です。だから、満洲というか極東、アジアで出版された新聞には非常に価値があるのです。特に1930年代、もちろんリビフとかの新聞もあるし、ウクライナの中でウクライナ語の新聞もあります。またその後アメリカの「ディーロ」という新聞もあり、移民が出しているものです。その内容を見比べると結構面白いのです。国の独立を主張しているのはやはりマンチュリアのものばかりです。後年は出版活動へ支援が行われていたこと考えると、やはり満洲ではほとんど自費で成り立っていたことが影響していると思います。

コウオジェイ ありがとうございます。どうぞ。

フロア4 先生方の話を大変興味深く伺いました。一つは、先生方のお話の中で、隠れた

テーマとして私は鉄道があるのではないかと考えております。1930年代、日露戦争以降、日本はやはり満鉄を中心に満洲での拡大をずっと求めてきたわけですが、ウクライナの方も東清鉄道に恐らくウクライナ人もたくさん関わったのではないかと思います。そして「緑のウクライナ」の動きの中にも、恐らく経済的な基盤や人的な資源ということを考えてときには、鉄道関係者の果たした役割をもう少し強調する必要があると思います。

農民の話が割と多かったと思うのですが、日本を考えればお分かりのように、やはり満鉄の周りに人が集まるといふ、満洲には19世紀半ばから20世紀半ばまでの約100年間、いろいろな地域の人が集まってきて、秩序が全く作れないままお互いに競争し合ったり排斥し合ったりするということですね。その中で鉄道が果たした役割が非常に大きいと。先ほど観光の話がありましたけれども、観光もやはり鉄道がキーワードになってくると思うのです。

それを考えますと、鉄道によって満洲はどういうふうに関与されてきたのかという視点から、この100年ぐらいの歴史像をどう作るのかといういろいろな話が出てきて、非常に分散しているような状態なのだけれども、鉄道で考えると意外と話がまとまりやすいという印象を受けましたので、そんなウクライナと東清鉄道の話をもっと少し教えていただけたらと思います。よろしくお願いします。

ホメンコ とても良い質問、どうもありがとうございました。もちろん1900年以降、ロシア帝国のモダナイゼーション、改革、文明開化において鉄道は欠かせない役割を果たしました。実は極東では何回か変革の波があり、特にストルイピンというロシアの首相による改革の後に結構人が流れているのです。

極東のウクライナ人にとって、鉄道事業は大きな利益をもたらしてくれました。鉄道会社では給料も年金も退職金も高額だったので、大勢が資産家になって部屋貸しなどの不動産業をしたりしました。しかし1930年代に入ると新政権が税金を上げ始め、徐々にその資産は失われていきます。結果、不動産を売ってマンチュリアを出ていく人々もたくさんいました。さらに1930年代半ばに中国とソ連が鉄道事業を巡って交渉しソ連のものとなったときに、ソ連のパスポートを取らないと鉄道で勤められないという状態になりました。残された選択肢は二つです。鉄道会社をやめるか、それともソ連パスポートをもらうか。でも、結局ソ連側を選んだ人もみんな最後はソ連に帰されて大変な目に合いました。

鉄道事業は、ウクライナ人を遠いところに連れて行って仕事を与えて、そこでお金を稼いで一時的にお金持ちにしました。でも結果的に全て失われ、鉄道との関わりは時代の流れと共に薄れていきました。鉄道がウクライナ人の運命に与えた影響はとても大きく複雑だったのです。

コウオジエ 塚瀬先生にこれから最後の総括をお願いしますけれども、総括に入る前に何か他の発表者の方、鉄道について何かコメントはありますか。

ナヒヤ とても大事な話題提供です。鉄道は確かにとても重要な役割を果たしました。特に中国の近代社会において、東清鉄道、モスクワからウラジオストクまで行く

鉄道、それに沿って満鉄ができたのですけれども、この鉄道はほぼ中国の東北地域の近現代史を変えた重要な役割を果たしました。今の私たちが取り扱っている都市なのでも、全部鉄道の駅です。ハルビン、瀋陽、長春、大連、旅順、全部鉄道の駅で、東北地域においては近現代史を変えた大きな役割を果たしました。

コウオジエイ ありがとうございます。

ヤン ご指摘ありがとうございました。確かに鉄道は本当に近代史を変えたと言ってもよいと思います。先ほどナヒヤ先生が長春という都市を挙げましたが都市空間研究の例としても長春はとても興味深いです。そもそも満洲は農作物を全国あるいは海外に運んでいましたが、それは全部水路で、つまり川なのです。長春や營口など全ての港の都市は元々川沿いにつくられたのです。

そこに鉄道が来て、東清鉄道と満鉄が始まったことで水路に依存しないで鉄道で貨物を運ぶことになり都市空間は大変大きく変わりました。麻田（雅文）先生の研究によると、東清鉄道と満鉄は1918年までロシア、中国、日本と広範囲にわたって中国商人の貨物、農産物を全国あるいは海外に運ぶことを競争しております。日本の鉄道付属地は便利ということで中国商人の町が出現するといったまさに地域社会に繋がる変革という点でご指摘のとおりだと思います。

コウオジエイ お話は尽きませんが、そろそろ終了の時間が来てしまいましたので、最後に塚瀬先生に今日のフォーラムの総括をお願いします。塚瀬先生、どうぞよろしくお願いします。

塚瀬 本日はいろいろありがとうございました。本日は、主要な点としてはホメンコ先生の「緑のウクライナ」という、ウクライナの人々が極東で、さらには満洲で活動していたと。そういう事実を発掘されて、ウクライナの歴史、ならびに北東アジアの歴史にどのようにウクライナの人たちの活動を位置付けるのか。そういうものを通して、北東アジアにおける民族や国家とは一体どういうものなのだろうかということを考えている趣旨でお話いただきました。私とすれば、マンチュリアという空間は、どのような歴史を経て、そしてなくなっていくのかということを中心に話をしてほしいというので、そのようにやったわけです。

そして私が、15世紀ぐらいから20世紀前半のマンチュリアの社会変容について話す中で、マンチュリアは多様性に富んだ地域でありますので、そこで活動したモンゴルの人たちの活動、モンゴルの人たちはどのような活動をし、何を目標としてやっていたのかということナヒヤ先生から、民国期につくられた東北師範学校を事例にしてマンチュリアで暮らしていたモンゴル人の人たちの動向について報告していただきました。

さらに20世紀前半になりますと、マンチュリアは大きく変わっていき、世界的にも大きく変わるわけですが、そういう中でヤン先生は、一体どのような世界、空間だったのかということのを、ポスターや写真などの視覚的な資料を

使って描き出そうとした。しかし、視覚的な資料をいろいろ検討し批判していくと、単純なイメージではなかなかくることができない。それでは結論付けることはできない。そういう多様性、さらにはそういう視覚的なものには帝国の意図が背景にあり、なかなかビジュアル的に表面的に見えたものが事実ですよ、真実ですよということは言えないという、大変複雑な時代へと20世紀前半以降入っていくところだと思います。

大きく地域的には、鉄道が敷設されてから人口が急激に増えていく、海外貿易が急激に増えていくという大きな社会変容が起こり、さまざまな人々がマンチュリアに入っていくような現象が20世紀前半は起きている。そういう中で、ではこういう地域に生きる人がどのような社会を築き、自分たち自身をどのように位置付けていこうかと。もちろんウクライナの人たちもいましたし、ハルビンにはさらにいろいろなロシア系などの人たちもいたわけですが、なかなかそれは1920年代ではうまく形を作ることができず、1932年の「満洲国」建国を迎えます。

「満洲国」はご承知のように五族共和というものを掲げ、単一の民族ではない国だということを表立っては言いますが、では具体的にどういうことをしたのかというのは、私の見解としては実はよく分からず、そういう看板を掲げましたけど、内実を埋めていくということは非常に場当たりの、何か長期的なプランがあって、五族共和は何年後にこんなふう達成するのだとか、そういうプランは作られましたけれども、現実にはそれがちゃんと動いたかというのは非常に疑問です。皆さんご承知のように、1937年に日中戦争が起こると、「満洲国」というものは日本の戦争経済を支える後方基地になってしまっていて、何でも戦争協力が一番前に置かれてしまい、それ以外のことは後ろに回されるということですので、掲げられた理想もなかなか現実に向かって動き出すのは難しく、1945年を迎えると。

そういう中で、ではマンチュリアをどのように統合していくのか、新しい国民をどうするのかというのは中華人民共和国の宿題として残されているものであり、その後進められた社会主義化や国民形成化をどのように検証していくのかというのは、本日の報告の趣旨から外れることですので、そこまではということなところでした。

まとめますと、マンチュリアという地域が19世紀後半から20世紀前半にかけて大きく変容する中で、さまざまな人々がさまざまに活動する場所になりました。そういうさまざまなものを、ただいろいろなものがありましたというふうに羅列するだけでは分析ではなく、そういうさまざまなものをどのように分析し、地域の歴史の中、さらには20世紀の世界史の中に位置付けていくのかという研究がやっと始まったのかなというのを私自身感じ、そういう研究が、本日参加した、私は日本人ですが、ホメンコ先生、ナヒヤ先生、ヤン先生、そういう外国の方たちの参加によってこれから進められていくということに私は新しい時代の息吹を感じて、私自身もう今年60歳になるのですけれども、自分自身も頑張らないといけないという思いを新たにしたいという今日でした。

コウオジエイ 塚瀬先生、ありがとうございました。今日はホメンコ先生の「緑のウクライナ」についての報告を皮切りに、塚瀬先生、ナヒヤ先生、ヤン先生と一緒に、その舞台となったマンチュリアについて考えました。私の短い感想を一言加えると、歴史研究の中での新しい動向としては、場所のことを考える、地理学から場所のつくり方のことを考えて、時代の流れだけではなくて場所とは何か、場所がどうやって変化していくのか、作られていくのか、変えていくのかという一つの大きな動向が見られるということを感じました。

もう一つは、マンチュリアのような場所の研究は、難しいと言うと変ですけども、そこにさまざまな民族、さまざまな言語を使って生活していた人たちがいたので、そういう複数の言語を使って研究していくことは、かなり大変なことです。大変なことこそ、私たちはやらないといけませんね。それこそいろいろな研究者の協力の上でできることで、一人が複数の言語を話す、もちろんそういう人はいますけれども、そこも限界があって、だからこそこうやって一緒にディスカッションしたり交流したり協力したりして、どういう資料があるのかということを考えることはすごく大事なと感じました。

発表者の皆さん、世界からこの関口にお集まりいただき、オンラインを通してこの場所に集まっていたいただき、本当にありがとうございました。いろいろな刺激的な話を聞かせてくださいました。

最後になりますが、このフォーラムを実現してくださった渥美財団のスタッフの皆さんに心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。これで今日のSGRAフォーラムを終了します。

講師略歴

■ オリガ・ホメンコ / Olga KHOMENKO

オックスフォード大学日産研究所所属英国アカデミー研究員。キウ生まれ。キウ国立大学文学部卒業。東京大学大学院の地域文化研究科で博士号取得。2004年度渥美奨学生。歴史研究者・作家・コーディネーターやコンサルタントとして活動中。

主な著書：藤井悦子と共訳『現代ウクライナ短編集』（2005年）、単著『ウクライナから愛をこめて』（2014年）、『国境を超えたウクライナ人』（2022年）を群像社から刊行。

■ 塚瀬 進 / TSUKASE Susumu

1962年生まれ。1991年中央大学大学院東洋史学専攻退学。日本学術振興会特別研究員などを経て、1999年長野大学産業社会学部専任講師。2009年長野大学環境ツーリズム学部教授。2023年4月より長野大学環境ツーリズム学部長（博士〔史学〕）。

主な著書：『満洲国一民族協和の実像―』（吉川弘文館、1989年）。『満洲の日本人』（吉川弘文館、2004年）。『マンチュリア史研究―「満洲」600年の社会変容』（吉川弘文館、2014年）。『溥儀 変転する政治に翻弄された生涯』（山川出版社、2015年）。

■ ナヒヤ / 娜荷芽 / Naheya

中国内蒙古大学蒙古学学院歴史系副教授（本フォーラム開催時。2023年10月現在は同教授）。東京大学大学院地域文化研究科で博士号取得。2011年度渥美奨学生。研究分野は中国近現代史、近現代モンゴル史、日中関係史。

主な著書：単著『二十世紀三四十年代内蒙古東部地区文教発展史』（内蒙古人民出版社、2018年）。訳著『民俗学上所見之蒙古』（鳥居きみこ著）（暨南大学出版社、2018年）など。

■ グロリア・ヤン ユー / 楊昱 / YANG Yu Gloria

2006年北京大学卒業。2018年コロンビア大学美術史博士号取得。東京大学東洋文化研究所訪問研究員を経て、九州大学人文科学研究院広人文学コース講師。近現代日本建築史・美術史を専門。2015年度渥美奨学生。

主な著書：近著に『圖像與空間：長春近代商埠地的空間形成與發展』（藝術理論與藝術史研究10、2022年12月）。

■ マグダレナ・コウオジェイ / Magdalena KOLODZIEJ

2018年デューク大学 Art, Art History & Visual Studies 学科で博士号取得。デューク大学でポスドクを経て、2019年から東洋英和女学院大学准教授。研究分野は、東アジアの近代美術史。2017年度渥美奨学生。

主な著書：近著に『Studying Art in Colonial Libraries』など。

ナヒヤ／娜荷芽

内蒙古大学蒙古学学院歴史系副教授

※所属・肩書は本フォーラム開催時。2023年10月現在、同教授。

2023年6月10日（土）日本時間午後2時より第71回SGRAフォーラム「20世紀前半、北東アジアに現れた『緑のウクライナ』という特別な空間」が開催された。コロナ禍以降初めて、登壇者全員が会場の渥美財団ホールに対面で参加。また、長野大学の塚瀬進先生以外、全員が元渥美奨学生という特筆すべきプログラムとなった。

開催にあたり司会のマグダレナ・コウオジェイ先生（東洋英和女学院大学）より、様々な民族や文化を内包して20世紀前半の北東アジアに出現した「緑のウクライナ」と呼ばれた特別な空間をテーマに取り上げた趣旨説明があった。その後、講演と話題提供が行われた。

最初はオリガ・ホメンコ先生（オックスフォード大学日産研究所）の講演「『緑のウクライナ』という特別な空間」。ロシア帝国は中国とのネルチンスク条約、アイグン条約、北京条約により極東の大きな領土を手に入れ、1861年の農奴解放令発布後、当時ロシア帝国に付属していたウクライナの「過剰」人口問題に対する方策として「極東に家族ごと移住すれば、巨大な農地がもらえる」と宣伝した。その結果、1870年からロシア革命までの間に大勢のウクライナ人が土地と自由な生活を求めて移り住んだ。1918年1月にキーウで独立共和国の宣言が行われた時、極東のウクライナ人は「緑のウクライナ」という国を作ろうとしていた。1920年代になるとソ連から逃れた100万人のウクライナ人がハルビンなどに移り住み、1945年まで留まっていた。講演ではウクライナ人がコミュニティを築き、協力しあって多様な活動を展開していた歴史を紹介した。

次は塚瀬進先生（長野大学）による「マンチュリアにおける民族の交錯」。「マンチュリア」はどのように形成され、変容したのか。そこに暮らした人々はどのように近代を迎え、現在に至ったのかを各時代の地図を用いて15世紀～17世紀半ばを萌芽期、17世紀～19世紀半ばを形成期、19世紀半ば以降を変容期と捉え、1949年の中華人民共和国建国までの歴史を考察し、国史と地域史の両方のまなざしによる歴史理解を追究した。

続いて娜荷芽（内蒙古大学）が「中国東北地域における近代的な空間の形成：

東北蒙旗師範学校を事例に」を報告した。20世紀前半の瀋陽に創設された東北蒙旗師範学校を事例に、中華民国成立後の1912～1930年代の軍閥混戦期に、内モンゴルの有識者たちが各地方政権と取引を行わざるを得なかったこと、モンゴル人を主体とする文化及び教育団体は相互に連携し活発な活動を行っていたこと、さらに漢語の著作や雑誌を通して漢族の有識者たちに自分の立場を訴えていたことなどについて考察した。

最後のグロリア・ヤンユー先生（九州大学）の報告「『マンチュリア』に行こう！」は視覚資料、小説、紀行文などを用いて20世紀前半の「マンチュリア」の生活空間の多様性を描き出し、この多様性に富む「越境する現場」空間の視覚表象は、日本帝国の拡張によって取捨され、単一化されつつあったことを説明した。講演と話題提供の90分間はあっという間に終わった。

自由討論は司会者が進行役となり、発表者4名が相互にコメントしあったり、会場からの質問に答えたりする形で進行した。会場の劉傑先生（早稲田大学）からの近代空間及び鉄道についての問題提起は、特に深く考えさせられた。松島芳彦様（共同通信社）、松谷基和先生（東北学院大学）、大野正美様（ネムロニュース）からも発表者へのコメントや質問があり活発な議論が展開した。総括で語られた塚瀬先生の「こうした議論の方向性は地域の歴史的要因の認識につながる」という話は興味深かった。会場とオンラインで参加して下さった皆様にもあらためて感謝を申し上げたい。

私にとってはコロナ後4年ぶりの日本で、雨中の東京を楽しんだ。十数年前の留学時代にお世話になった東京大学教務課国際交流支援チームの坪山様にもお会いでき、週末で賑わう人々の明るい笑顔に元気づけられた。世界中の人々が平和の中で安心して暮らしていただけますように！

（娜荷芽「第71回SGRAフォーラム報告：20世紀前半、北東アジアに現れた『緑のウクライナ』という特別な空間」より転載）。



SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一歩」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命：ITは教育をどう変えるか」
臼井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蔣 惠玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. プレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 + 宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B. ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 榮濬
2003. 12. 4 発行
- SGRA レポート20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：COP3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行
- SGRA レポート24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート25 第14回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005. 1. 24 発行
- SGRA レポート27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッチ、朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか-地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマガチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力における
ソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行
- SGRA レポート30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考—自由と市民社会をキーワードに—」
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F. マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか—留学生—」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラバープ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一 2006. 4. 10 発行

- SGRA レポート33 第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート34 第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤヤ、ミラ・ゾンターク、
セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート35 第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート36 第25回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート37 第1回チャイナ・フォーラム in 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート38 第6回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート39 第26回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート40 第27回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチャー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート41 第28回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤヤ 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート42 第2回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15年—無理解と失敗から
相互理解と信頼へ—」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート44 第29回フォーラム講演録 「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ
2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート45 第30回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～
日本、中国、シンガポール～」 佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート46 第31回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート47 第32回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8 発行
- SGRA レポート48 第3回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く—
アジアの留学生と生活を共にした協会の50年」 工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート49 第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
- SGRA レポート50 第8回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」
平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行
- SGRA レポート51 第35回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」
大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
- SGRA レポート52 第36回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21世紀の課題」
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チイ、
劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート53 第4回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること～
TABLE FOR TWO～」 近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行
- SGRA レポート54 第37回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：
東アジアのエリート高校教育の現状と課題」 玄田有史 シム・チュンキャット
金 範洙 張 健 2010. 5. 10 発行
- SGRA レポート55 第38回フォーラム講演録 「Better City, Better Life ～東アジアにおける都市・
建築のエネルギー事情とライフスタイル～」 木村建一、高 偉俊、
Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、
葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 劍宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート56 第5回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」
第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」 高見邦雄、汪 敏、張 昌玉
第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」 高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン
2011. 5. 10 発行
- SGRA レポート57 第39回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」 井上まどか、
ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島蘭 進、陳 継東
2011. 12. 30 発行
- SGRA レポート58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」 平川 均 2011. 2. 15 発行

- SGRA レポート 59 第10回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300年前の東アジア地域交流」
朴亨國、金尚泰、胡潔、李成制、陸載和、清水重敦、林慶澤 2012. 1. 10 発行
- SGRA レポート 60 第40回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」
田多英範、李蓮花、羅仁淑、平川均、シム・チュンキャット、F・マキト 2011. 11. 30 発行
- SGRA レポート 61 第41回SGRAフォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川恵市、黒柳米司、朴榮濬、
劉傑、林泉忠、ブレンサイン、李成日、南基正、平川均 2012. 6. 18 発行
- SGRA レポート 62 第6回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録
「Sound Economy ～私がミナマタから学んだこと～」 柳田耕一
「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」 郭偉
2012. 6. 15 発行
- SGRA レポート 64 第43回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」
朴榮濬、渡辺剛、伊藤裕子、南基正、林泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート 65 第44回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」
赤堀侃司、影戸誠、曹圭福、シム・チュンキャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート 66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994-1998年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭
2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート 67 第12回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」
平川均、加茂具樹、金雄熙、木宮正史、李元徳、金敬黙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート 68 第7回SGRAチャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」
（日本語・中国語・英語） 宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート 69 第45回SGRAフォーラム講演録「紛争の海から平和の海へー東アジア海洋秩序の現状と展望ー」
村瀬信也、南基正、李成日、林泉忠、福原裕二、朴榮濬 2014. 10. 20 発行
- SGRA レポート 70 第46回SGRAフォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」
荒川智、上原芳枝、ヴィラーク ヴィクトル、中村ノーマン、崔佳英 2015. 4. 20 発行
- SGRA レポート 71 第47回SGRAフォーラム講演録「科学技術とリスク社会ー福島第一原発事故から考える科学技術
と倫理ー」 崔勝媛、島蘭進、平川秀幸 2015. 5. 25 発行
- SGRA レポート 72 第8回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」
佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20 発行
- SGRA レポート 73 第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回SGRAフォーラム講演録「アジア経済のダイナミズムー
物流を中心に」 李鎮奎、金雄熙、榎原英資、安秉民、ドマンホーン、李鋼哲 2015. 11. 10 発行
- SGRA レポート 74 第49回SGRAフォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」
劉傑、平野健一郎、南基正 他15名 2016. 6. 20 発行
- SGRA レポート 75 第50回SGRAフォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらしー環境と女性と未来に向けて」
神崎智子、斉藤淳子、李允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27 発行
- SGRA レポート 76 第9回SGRAチャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中200年ー文化史からの再検討」
劉建輝 2020. 6. 18 発行
- SGRA レポート 77 第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力ー共進化アーキテクチャ
の模索」 孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10 発行
- SGRA レポート 78 第51回SGRAフォーラム講演録「今、再び平和についてー平和のための東アジア知識人連帯を考え
るー」 南基正、木宮正史、朴榮濬、宋均宮、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27 発行
- SGRA レポート 79 第52回SGRAフォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」
劉傑、趙珖、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ
2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート 80 第16回日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力ー新たなアジア型モデルの模索ー」
金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート 81 第56回SGRAフォーラム講演録「人を幸せにするロボットー人とロボットの共生社会をめざして第
2回ー」 稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20 発行
- SGRA レポート 82 第57回SGRAフォーラム講演録「第2回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性ー蒙
古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」 葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニ
バートル、向正樹、孫衛国、金甫枕、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10 発行
- SGRA レポート 83 第58回SGRAフォーラム講演録「アジアを結ぶ？『一帯一路』の地政学」 朱建榮、李彦銘、朴榮
濬、古賀慶、朴准儀 2018. 11. 16 発行
- SGRA レポート 84 第11回SGRAチャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」 塚本磨充、呉孟晋
2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート 85 第17回日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」
孫赫相、朱建榮、文昊鍊 2019. 11. 22 発行

- SGRA レポート 86 第59回SGRA フォーラム講演録「第3回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17世紀東アジアの国際関係一戦乱から安定へ」三谷博、劉傑、趙琬、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、許泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姪姫、趙軼峰 2019. 9. 20 発行
- SGRA レポート 87 第61回SGRA フォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!？」沈雨香、吉田文、シン・ジョンチョル、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行
- SGRA レポート 88 第12回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「日中映画交流の可能性」刈間文俊、王衆一 2020. 9. 25 発行
- SGRA レポート 89 第62回SGRA フォーラム講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…? ——不都合な真実を超えて」ルウェリン・ヒューズ、ハンス＝ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵 2019. 11. 1 発行
- SGRA レポート 90 第63回SGRA フォーラム講演録「第4回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」三谷博、大久保健晴、韓承勳、孫青、大川真、南基玄、郭衛東、塩出浩之、韓成敏、秦方 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 91 第13回SGRA-Vカフェ講演録「ポスト・コロナ時代の東アジア」林 泉忠 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 92 第13回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「国際日本学としてのアニメ研究」大塚英志、秦 剛、古市雅子、陳 夔 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 93 第14回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」稲賀繁美、劉 曉峰、塚本磨充、王 中忱、林 少陽 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 94 第65回SGRA-Vフォーラム講演録「第5回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」朴 漢珉、市川智生、余 新忠 2021. 10. 05 発行
- SGRA レポート 95 第19回日韓アジア未来フォーラム講演録「岐路に立つ日韓関係：これからどうすればいいか」小此木 政夫、李 元徳、沈 揆先、伊集院 敦、金 志英、小針 進、朴 栄濬、西野 純也 2021. 11. 17 発行
- SGRA レポート 96 第66回SGRA フォーラム講演録「第6回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性 人の移動と境界・権力・民族」塩出浩之、趙 阮、張 佳、榎本 渉、韓 成敏、秦 方、大久保健晴 2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 97 第67回SGRA フォーラム講演録「『誰一人取り残さない』如何にパンデミックを乗り越えSDGs実現に向かうか—世界各地からの現状報告—」佐渡友 哲、フェルディナンド・C・マキト、杜 世鑫、ダルウィッシュ ホサム、李 鋼哲、モハメド・オマル・アブディン 2022. 2. 10 発行
- SGRA レポート 98 第15回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「アジアはいかに作られ、モダンはいかなる変化を生んだのか?—空間アジアの形成と生活世界の近代・現代—」山室信一 2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 99 第68回SGRA フォーラム講演録「夢・希望・嘘—メディアとジェンダー・セクシュアリティの関係性を探る—」ハンブルトン・アレクサンドラ、バラニャク平田ズザンナ、于寧、洪ユン伸 2022. 11. 1 発行
- SGRA レポート 100 第20回日韓アジア未来フォーラム講演録「進撃のKカルチャー——新韓流現象とその影響力」小針 進、韓 準、チュ・スワン・ザオ 2022. 11. 16 発行
- SGRA レポート 101 第69回SGRA フォーラム講演録「第7回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」韓 成敏 2023. 3. 22 発行
- SGRA レポート 102 第16回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「モダンの衝撃とアジアの百年—異中同あり、通底・反転するグローバルイゼーション—」山室信一 2023. 6. 14 発行
- SGRA レポート 103 第70回SGRA フォーラム講演録「木造建築文化財の修復・保存について考える」竹口泰生、姜 璿慧、永 昕群、アレハンドロ・マルティネス、塩原フローニ・フリデリケ 2023. 11. 10 発行予定
- SGRA レポート 104 第21回日韓アジア未来フォーラム講演録「新たな脅威（エマージングリスク）・新たな安全保障（エマージングセキュリティ）—これからの政策への挑戦—」金 湘培、鈴木一人 2023. 11. 15 発行予定

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局（Tel：03-3943-7612 Email：sgra@aisf.or.jp）へご連絡ください。

SGRAレポート No. 0105

第71回SGRAフォーラム

20世紀前半、北東アジアに現れた 『緑のウクライナ』という特別な空間

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)
〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8
Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512
SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>
電子メール: sgra@aisf.or.jp

発行日 2023年10月30日
発行責任者 今西淳子
印刷 (株) 平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。
©Sekiguchi Global Research Association Copying is Prohibited. For inquiries or quotes, please contact us.

